

石名山窯跡発掘調査報告

1986

大門町教育委員会

序

埋蔵文化財に対する興味や関心は、近年とみに昂まりつつあります。それは遠い祖先の残した文化遺産から往時の人々の生活を正確に窺い得る手懸りであり、未知を解明するロマンを秘めておるからでありましょう。

このたび、畑地造成のため丘陵地の斜面を掘削中に偶然発見された石名山の窯跡につきましても、7・8世紀の須恵器窯跡と推定され、当時における一大須恵器生産地の姿が浮彫にされてきております。この調査を通して、往時の人々の喧噪と、たくましい息づかいが聞こえてくるではありませんか。

調査の終了に際し、直接現場で調査に当られた県埋蔵文化財センターの調査員の諸氏、適切な指導・助言を賜った調査指導委員の諸先生、そして県文化課の各位、地元関係各位にあらためて深く謝意を表します。

本報告書に盛られた諸成果が、地域住民の文化財の保護意識の高揚に役立つことを願い、序の言葉にかえたいと思います。

大門町教育委員会

教育長 春田 保一

例　　言

1. 本書は、富山県射水郡大門町水戸田に所在する石名山（いしなやま）跡跡の発掘調査報告である。
2. 調査は、国庫及び県費の補助を受けた大門町教育委員会が、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けて実施した。
3. 調査事務は、富山県教育委員会文化課及び富山県埋蔵文化財センターの指導を受けて、社会教育係長山内英夫、学校教育係長岡田征雄が担当し、教育次長藤沢義典が統括した。
4. 調査参加者は以下のとおりである。
調査担当者　富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事池野正男・同宮川進一、調査員　同主任岸本雅敏、調査補助員　岡本淳一郎
5. 考古地磁気の測定は富山大学理学部教授広岡公夫氏に、放射性炭素年代測定については、石川考古学会員木立雅郎氏にお願いし、各氏から手稿をいただいた。
6. 調査期間中及び報告書作成にあたり下記の方々から御指導、御助言をいただいた。記して謝意を表したい。（以下敬称略）
富山大学人文学部教授秋山進午、助教教授田崎啓（現立命館大学文学部助教授）、富山考古学会員西井龍蔵、伊藤慶三、石川県立埋蔵文化財センター平田大秋、出崎明人、小堀芳孝、福島正火、北野博司
7. 本書の執筆・編集は、池野正男・宮田進一・北川美佐子（富山大学卒業生）が行った。なお文責は文末に記した。
8. 遺物実測図は原則として4分の1、遺物写真は2.5分の1である。それ以外の縮尺は、それぞれ別に記した。

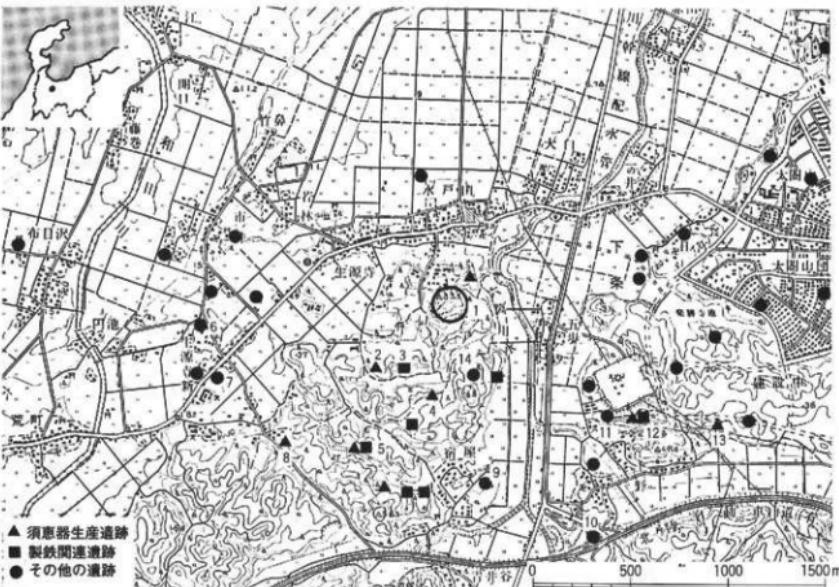
目　　次

I 位臯と周辺の遺跡	1	V 調査の結果	17
第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	1	表1 杯蓋・杯口口径表	18
II 旧南郷中学校所蔵の遺物	2	第16図 陶棺実測図	19
第2図 旧南郷中学校所蔵の遺物	2	第17図 上野遺跡第Ⅱ台地8号住居出土遺物	20
第3図 旧南郷中学校所蔵の遺物	3	第18図 小杉流山No.6選跡	-
III 調査の経緯	4	中山工芸跡群A地区出土遺物	21
IV 発掘調査	4	表2 杯蓋・杯口口径表	23
第4図 地形と区割図	4	表3 法基表	25
第5図 遺構全体図	5	第19図 半周窓跡採取遺物	26
第6図 2号窓出土遺物	6	第20図 小杉流山No.16道路2号窓-Ⅰ・Ⅱ	-
第7図 2号窓火葬窓	-	出土遺物	27
第8図 2号窓・西地区穴出土遺物	7	第21図 小杉流山No.16道路1号窓及び	-
第9図 1号窓実測図	9	周辺出土遺物	28
第10図 1号窓・渡槽上出土遺物	10	VI 自然科学的分析	31
第11図 2・3・4号穴実測図	12	1 石名山1・2号窓の考古地磁気測定	31
第12図 1・2・3号穴出土遺物	13	2 富山県大門町石名山窓跡の	-
第13図 4・11号穴出土遺物	14	西地区穴の ¹⁴ C年代測定	34
第14図 表探遺物	15	写真図版	-
第15図 表探遺物	16		-

I 位置と周辺の遺跡

石名山窯跡は射水平野南部の金山丘陵西側北端に位置する。丘陵一帯は青井谷泥岩層（新第三紀上部の音川累層）から成り、北の日の宮付近には吳羽丘陵の岬茶屋層に比する日宮互層が発生している。この互層粘土は、良質の瓦の原料となっており、現在でも瓦生産が営まれている。丘陵端部は、下条川と和田川によって開析され、中央部は狭長な冲積地が樹枝状に入り込み、滑れ谷のような地形を示している。西側には和田川によって芹谷野段丘が形成され、市ノ井付近からは扇状地が広がっている。

周辺の遺跡としては、縄文時代では、中期後半の串田新遺跡、生源寺新遺跡がある。布目沢や市ノ井付近など、かつて低湿地であったと思われる場所から須恵器が発見されている。又、一帯は古墳が多く、丘陵西方には5世紀末～6世紀頃のものと思われる大塚古墳があり、付近には、今は破壊されてしまったが、「十三塚」と称される古墳群が形成されていた。他にも宿屋古墳、五歩一古墳群、山王宮古墳群などがある。当遺跡と小谷を挟んで立地する流通業務団地内遺跡群は、先土器時代から中世に至るあらゆる時代の遺跡の宝庫となっている。又、当遺跡も含めて、丘陵西側は須恵器窯が多く発見されている。生源寺窯跡、流田No.16遺跡（3基）、No.7遺跡（7基）、No.18遺跡A地区（1基）、小杉丸山遺跡（須恵器窯3・瓦陶兼業窯1）、天池窯跡（2基）などがあり、須恵器の大生産地を成していたと思われる。南方の弥生末期・古墳時代後期の集落跡が発見された上野遺跡は、その消費地として重要な位置を占めている。これらの遺跡から、7世紀初頭に開始され、8世紀中頃まで連続と続けられた、丘陵上における須恵器生産の流れが概観できる。当遺跡の調査もその問題点を解明する上で大きな役割を果している。（北川）



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

1. 石名山窯跡 2. 小杉丸山No.7遺跡 3. 小杉丸山No.6遺跡 4. 小杉丸山No.16遺跡 5. 小杉丸山遺跡 6. 大家古墳 7. 生源寺新遺跡 8. 生源寺古墳 9. 滑れ谷古墳 10. 上野諸跡 11. 南太閤山1号墳
12. 南太閤山2号墳 13. 天池窯跡 14. 五歩一古墳群

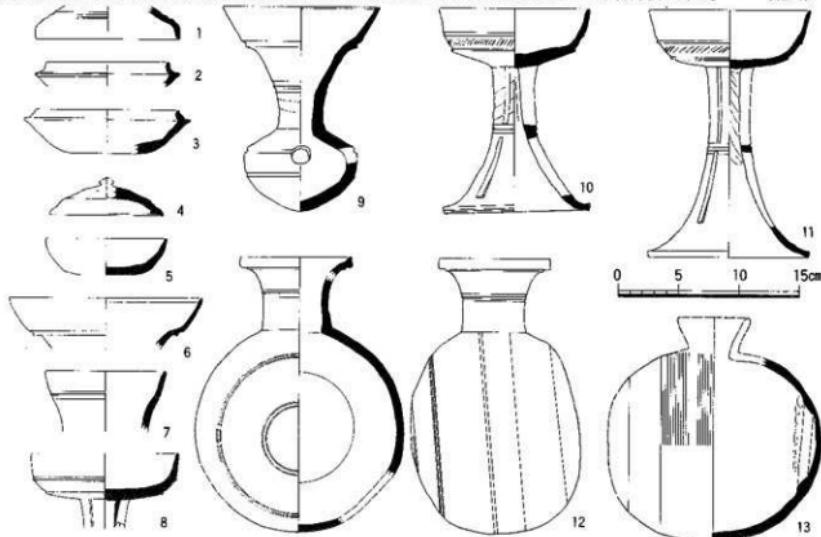
II 旧南郷中学校所蔵の遺物

旧南郷中学校は大門町牛源寺新に所在し、主に水戸田、牛源寺付近一帯で採集された、繩文時代から近世に至る遺物を所蔵していた。ここでは、古墳時代から近世に至る遺物を扱う。尚、遺物は現在、大門町牛田公民館が所蔵する。

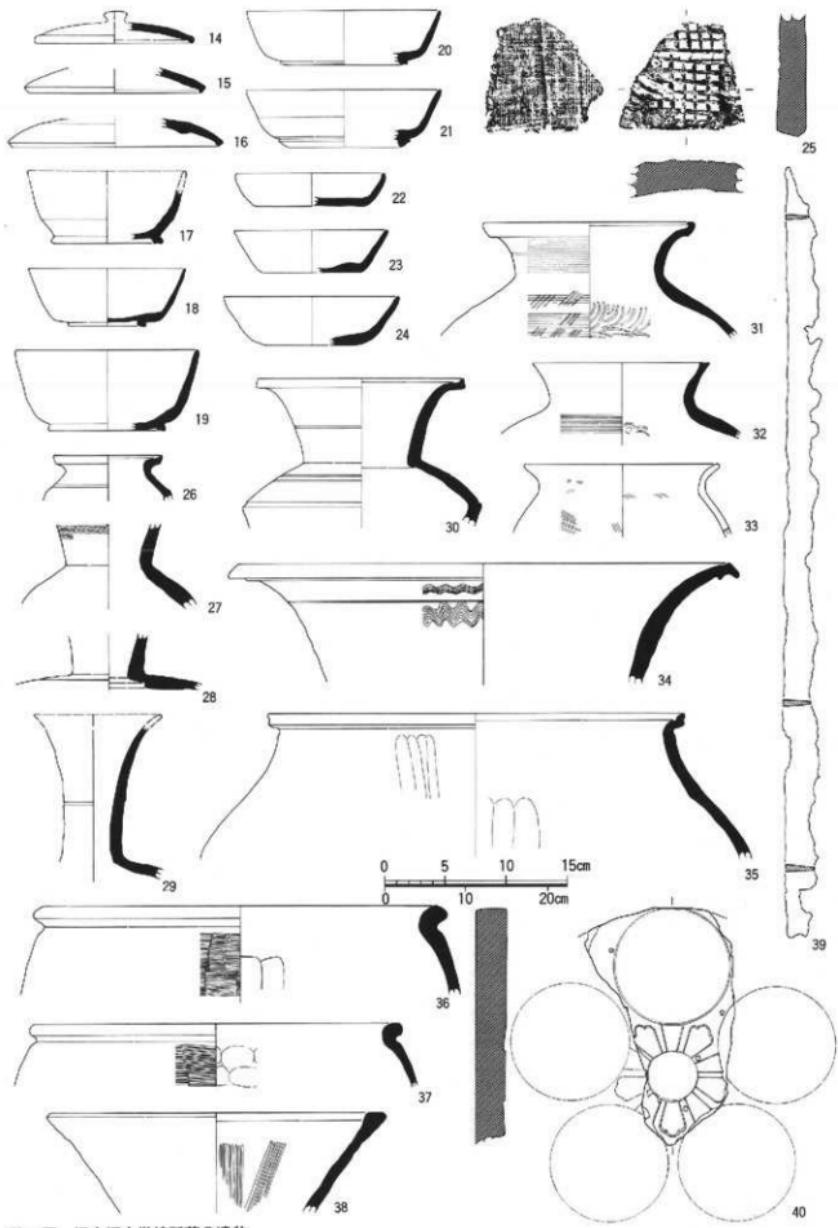
古墳時代 須恵器 (第2図・3図31) 杯蓋4は口径9.4cm、頂部ロクロ削り、内面に小さなかえりを有す。小型の宝珠紐が付くものと思われる。杯2・3は共に扁平な体部に水平にのびる受け部を有す。7は提瓶の口縁か。瓶9は口頭部が大きく外反し、丸味のある体部に2条の沈線を施す。高杯10は杯部にヘラ先による斜線の文様帯を施す。脚部には二段三方の透しが穿たれ、内面に螺旋状のしほり口。12は提瓶。体部はロクロナデ、一部ロクロ削り、体部片面に2条の沈線による同心円を廻らす。13は横瓶。体部はロクロ削りとカキ目調整、径5.5cmの円板で塞孔。壺31は口縁が膨らみ内側に巻き込む形態、頸部カキ目調整、体部はタタキ後、カキ目調整。上器 (第3図33) 小型壺。体部外面ハケ目調整、内面ハケ目調整後、ナデる。直刀 (第3図39) 生源寺地内の直径15mの円墳から出土。長さ83cm。4・5は7世紀中葉まで下るが、他は6世紀後半から7世紀初頭。

奈良・平安時代 須恵器 (第3図14~24・26~30・32~34) 杯蓋16は頂部をロクロ削りとロクロナデ調整。杯17は体部下面に削りを施した稜擁。26~30は壺。26は口径8.8cmの小型壺。短い頸部がくの字に屈曲。30は受口状口縁の広口壺。壺34は口縁端部が上下に肥厚し、頸部に2条の備播波状文を廻らす。平瓦 (第3図25) 四面布目痕、凸面7×(7+α) の格子叩き目。この叩き目は小杉丸山遺跡出土瓦のA叩き目¹¹²と類似し、同一叩き原体とも思われるが、焼成による取縮などもあり、断定は避けた。

中世・近世 (第3図35~38・40) 35は壺の口縁。八尾町京ヶ峰古窯焼成品。¹¹³ 口縁たちあがりをヘラアテにより作り出し、端部をヘラで面取り。13~14世紀。36~38は珠洲焼。38は播鉢で、口縁上面で面を取り、8本以上の備衛結束で卸し目を放射状に施す。14世紀後半か。40は捺端板の一種。富山市丸の内の婦人会館建設の際発見され、富山藩六代目前田利興の建てた、藩校広徳館の瓦とされる。表面を前田家の家紋である丁字梅鉢紋で飾る。 (北川)



第2図 旧南郷中学校所蔵の遺物



第3図 旧南郷中学校所蔵の遺物

III 調査の経緯

石名山窯跡は、大門町水戸田神明堂に所在する。当地内から小杉町吉井谷地内にかけての丘陵部は小杉流通業務団地（以下小杉流団と呼ぶ）造成工事に先立つ分布調査で数多くの窯跡等の遺跡が発見され、本調査が実施されている。

窯跡は、北東にのびた小丘陵の南側斜面に位置し、小杉流団とは小谷を挟んで接する。小杉流団各窯跡との直線距離はNo 7 窯跡が南北方向に約550m、No16遺跡窯跡群とは、丘陵一つ越えた南方約500mにある。

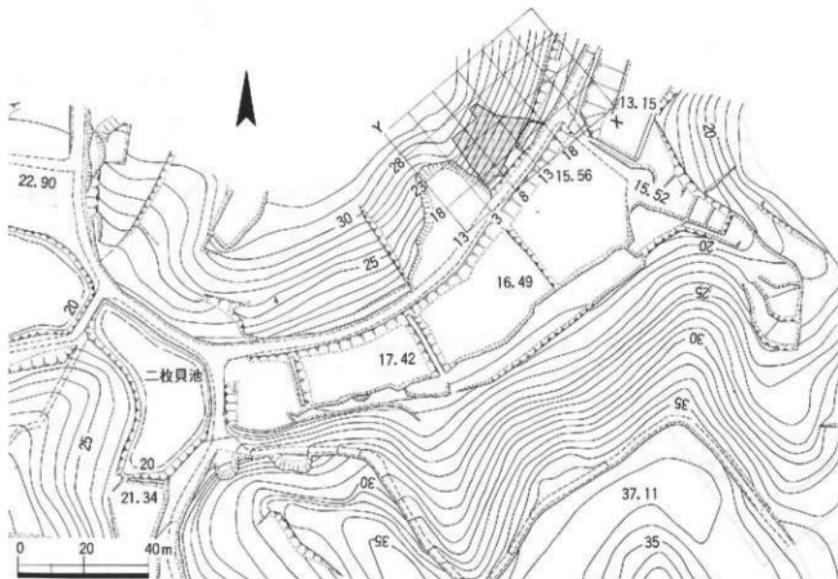
昭和59年10月に地区民から須恵器出土の連絡を受けた富山県埋蔵文化財センターは、急遽上取り施行者である清水瓦店清水源治氏、大門町教育委員会の三者で保護措置についての打ち合わせをもつこととなった。その結果、次年度に国庫及び県費補助を受けて本調査を実施することとなり、その間の土取りは窯跡に支障のない北側で実施することで合意した。

本調査は、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けて、昭和60年4月25日から6月6日の間実施した。調査面積は約300m²である。

IV 発掘調査

1 2 号 窯（第7図 図版3の1～5）

立地と窯体規模 2号窯は焚口付近で20.40m、煙出し底面で24.50mの標高を測り、4.1mの比高差をもつ。窯体は等高線とはほぼ直交し、主軸方向をN-41°-Wにとる。遺存状態は、前庭部及び焚口の一部を欠くが、燃焼部の天井が残存するなど総体的には良い。床面の長さは、断面図作成線上で11.7m、煙出し上面のすり鉢状のピットを含め



第4図 地形と区割図

た総延長は12.9mを測る。

焚口と燃焼部 床幅が広がりを見せ、また、二次床面上に焼き台転用須恵器が置かれる地点までを焚口・燃焼部とすると、長さ1.6mを測る。床幅は焚口部分が最も狭く90cmで、側壁は垂直に近い角度で立ちあがる。焚口から燃焼



第5図 遺構全体図

部にかけての床面はほぼ水平に掘られた後、燃焼部方向にわずかに低くなる傾斜をもたせた黄褐色土埋上が認められる。埋土の厚さは最大で10cm程度で、不純土層を含まず窯体構築時に形成されたものと推定される。埋土上には数cmの灰層が認められる。燃焼部から焼成部にかけての床面には1・2次床面を壊して長さ約2.7m、幅85cmの溝状の穴が掘り込まれる。覆土は、還元及び酸化窯壁まじりの埋土で、再び埋土上面に焼成面が形成される。覆土中からの出土遺物には、杯蓋、杯、高杯などの破片がある。

燃焼部の天井は一部残存(D-D'セクション図)しており、断面形状はカマボコ状を呈し、最終床面からの高さは最大で90cmを測る。また、東側側壁の還元面が垂直に切れる部分が認められる。これは、90cm程度の天井が、この部分で1.4m以上になることを意味する。類例は小杉流田No.7遺跡第3号窯跡にある。焚口の側壁還元面は、手前徐々に低くなり、色調も黄褐色還元面となる。

焼成部 煙出しまでの長さ10.1m、床面最大幅2.3m、遺構検出面からの深さは最大で1.9mを測る。床面は弓なりにあがり、傾斜は最も急な中央部で約32度を測る。還元面は中央部から手前及び側壁際で2枚認められ、煙出し近くでは黒色化する。還元層の厚さは約1cm、酸化層の厚さは約3cmを測る。

1次床面上には拳大の河原石、焼き台転用の須恵器が僅かに残る。この中には、河原石2個を据えその上に壺破片を置き平坦を作るもの、杯蓋の完形品を伏せたものなどがある。

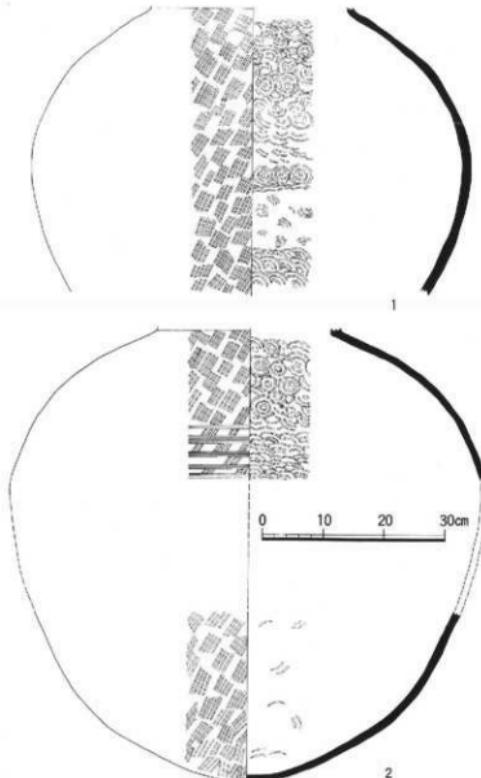
2次床面上にも拳大から人頭大の河原石と大甕破片の焼き台のみで、両側壁に寄せ集められた状態で出土し、河原石が出土量の3分の2を占める。第6図1・2は焼き台に利用された大甕の体部破片である。

側壁は床面より最大で70cmまで残存し、幅10cm前後の工具痕が多く認められる。貼り壁は両壁の小範囲に認められる。

煙出しと排水溝 焼成部から登ってきた床面は、わずかに掘り深められた排水溝に至る。煙出し及び排水溝には還元面は認められず、酸化面は排水溝の途中まで広がる。排水溝の平面形態はほぼ直線的にのび、全長7.3m、最大深1.1mを測る。断面形態は「U」字状を呈する。類例は小杉流田No.7遺跡第1・5号窯跡¹⁴⁾・同No.16遺跡第3号窯跡¹⁵⁾がある。

出土遺物(第6・8図)

出土遺物は少なく、大部分が大甕体部破片であるが、僅かに杯蓋、杯、有蓋高杯、無蓋高杯、提瓶、魁、壺、甕、陶錘などの破片がある。



第6図 2号窯床面出土遺物

-26.80

-24.80

B

B' 21.60

A

A' 21.30

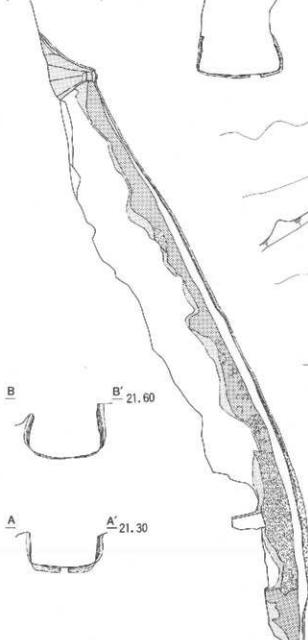
I

I

I' 25.40

J

J' 25.70



I



H

H'

24.90



F

E

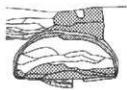
23.30



D

C

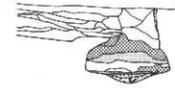
22.30



G

C'

22.10



茶・黒褐色土

黄褐色土(地層)

焼土層(酸化窓壁)

青灰色層(還元窓壁)

貼り壁

埋土



-24.80

-09.92

G

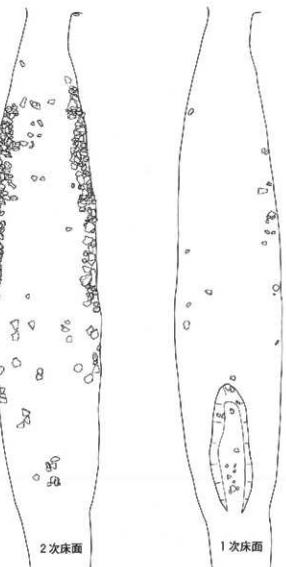
E

G'

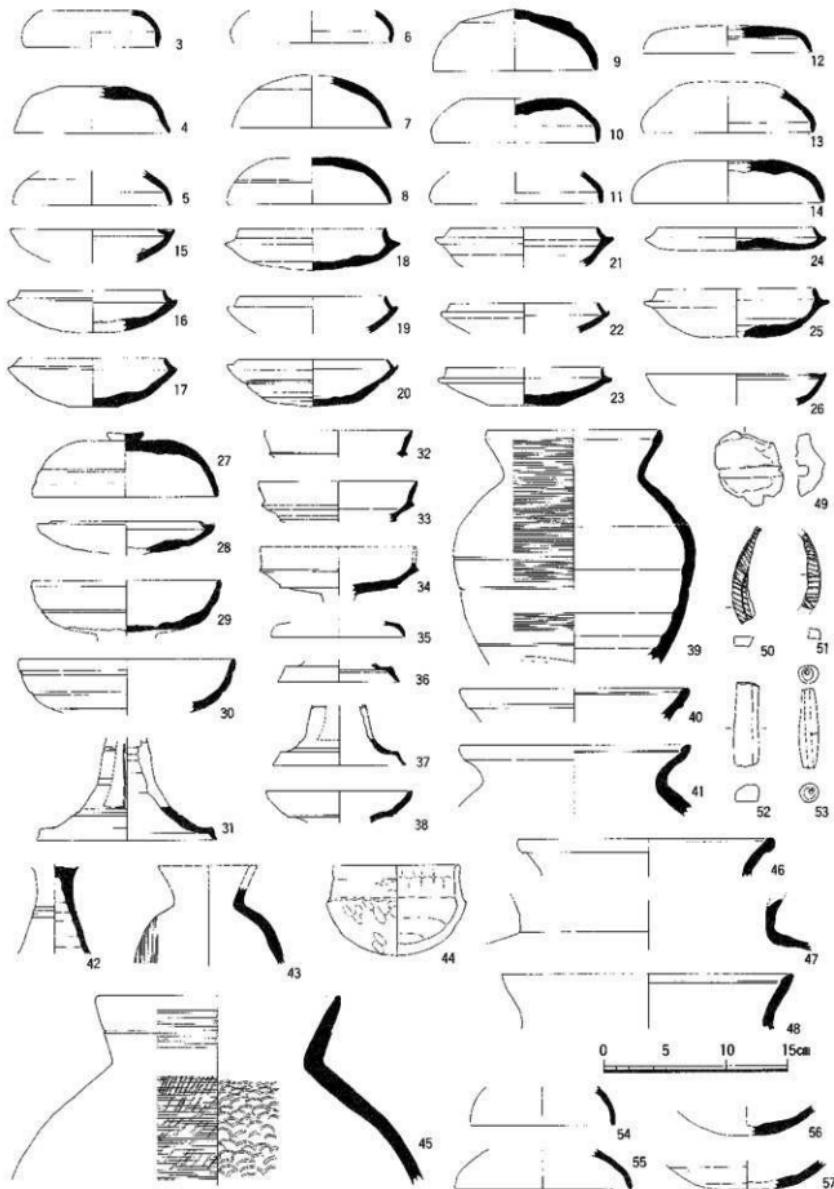
E'

24.00

22.40



第7図 2号窯実測図



第8図 2号窯・西地区穴出土遺物

9-21, 25-29, 30-48. 1大底盆. 5-8, 13-16, 19-24, 28, 31-33, 35-37, 39-40, 46-53. 2次床面
7-10, 11-15, 30-22, 26-27, 34-38, 42-49, 51. 黄口 (Yellow mouth)
14. 耕水清. 5-44, 45-47. 壶上上蓋. 34-37. 盆地区穴

2 1 号 窯 (第9図、図版4の1~5)

立地と窯体規模 1号窯は2号窯の西側4mの位置に、並行して構築される。窯体は、焚口と焼成部の床面及び煙出し周辺が破壊されている。残存長は西側側壁際で11.1mを測る。標高は焼成部中央でわずかにふくらむ程度で直線的にのびる。主軸はN-43°Wにとる。

燃焼部 床面の大部分を失なっている。わずかに西側側壁際の床面が残り、傾斜が3度程度と緩く、燃焼部の一部と推定される。側壁は、わずかに丸味をもって立ちあがり、貼り壁が認められる。

焼成部 床面はわずかに弓なりになりながら登り、傾斜は最大で33度を測る。還元層は1枚で厚さ2cm、酸化層は5cmを測る。中央から奥の床面上には直径28~38cmの穴が直線的には等間隔に掘り込まれている。穴の底面及び壁面も還元していることから、製品の出し入れ用の足かけ穴と推定される。

床面上からは、焼き台に転用された杯B蓋、杯A、杯B、甕が散乱状態で出土した。床面の最大幅は1.4mで、断面形態は、わずかに丸味を持つ。

側壁還元層は最も残存状態の良い部分で95cmを測り、全面貼り壁が施される。貼り壁は多い所で3枚認められる。

煙出しと排水溝 床面より約10cm掘りくぼめられた小規模の排水溝が西側にのび、底面及び壁面は酸化している。

床面出土遺物 (第10図58~88・88~94・97~100・102・103・105)

床面上からの須恵器には杯B蓋、杯B、杯A、長頸甕、短頸甕、甕などの破片が出土した。

杯B III蓋 (58~71) 口径14.1~15.5cmの杯B III蓋で、半坦な頂部に下方に折れる縁端部が付く。つまみは扁平で中央部が高まり、最大径2.6~3.1cm。頂部外面は、全て右まわりのロクロ削りされ、縫部近くまで施されているもの(60・70)もある。内面は一方向のナデ(67・68・70)、不定方向のナデ(69)、仕上ナデ(61・62)、中心部までロクロナデ(65・66)がある。

杯B (72~86) **杯B I** (72) は口径9.4cm、高さ3.5cm、底部外面はヘラ切り。杯B III (73~86) は口径13.1~14.8cmで底部外面はヘラ切り、ロクロナデされる。内面は、不定方向のナデ(82)、一方向のナデ(75)などがある。

杯A II (89~94・97~100) 口径11.4~13cmの杯A II。底部外面はヘラ切り、軽いナデ付け、内面は中心部までロクロナデと仕上ナデ調整する。

窯体覆土出土遺物 (第10図87・95・96・101・104)

杯B III (87) は口径14.8cm、高さ6.3cm、底部外面はロクロ削り、内面は一方向のナデ調整する。

広口甕 (101) 体部破片。体部外面下半はロクロ削り、底部外面はナデ付け及びロクロナデ調整。

3 1号穴と出土遺物 (第12図121~127、図版5の5)

2号窯の東側に位置する直径27cm、深さ20cmの小さな穴である。覆土中から杯B蓋5点、杯B III 2点が出土した。

杯B III蓋 (121~125) 口径14.3~15.4cm、つまみは扁平で中央部がわずかに高まり、直径2.4~3cmを測る。頂部内面は一方向のナデ(121・122・125)、仕上ナデ(124)調整されたものがある。

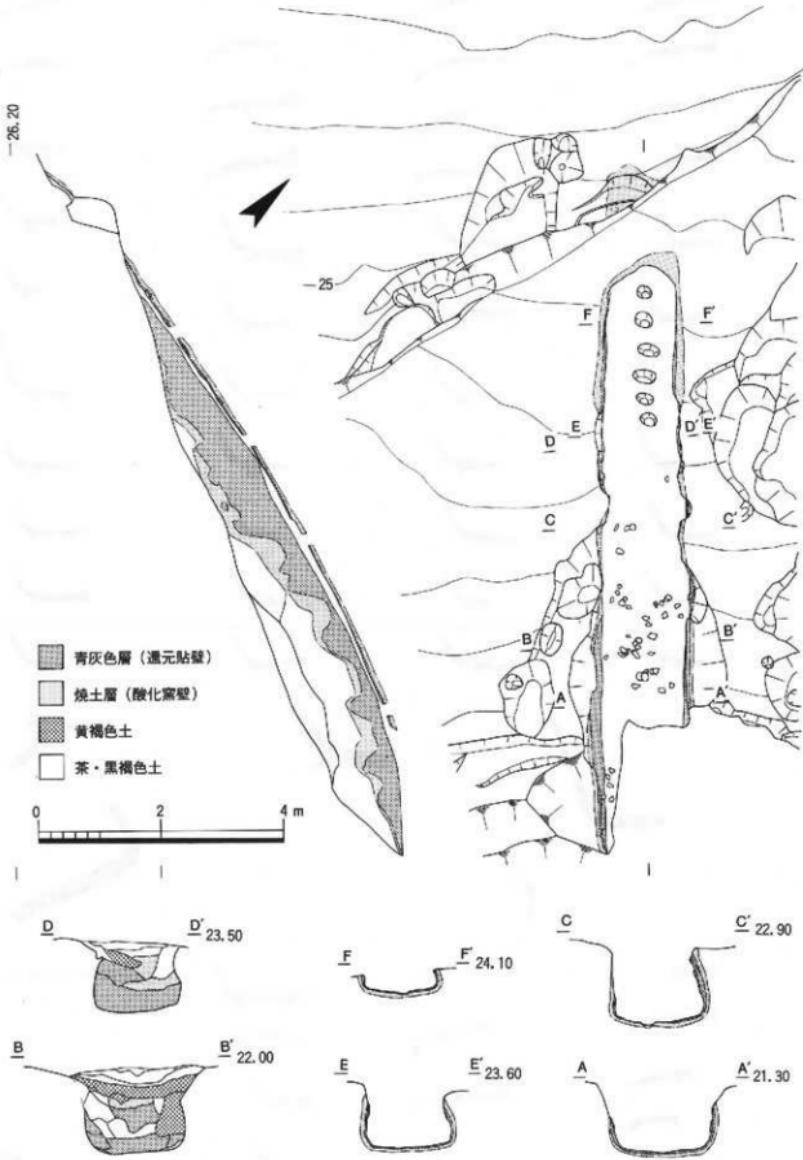
杯B III (126~127) 口径13.4~14.4cmでわずかに屈曲した口縁部をもつ。底部外面はヘラ切り、軽いナデ付け。

4 2~4号穴 (第11図、図版5の1~4)

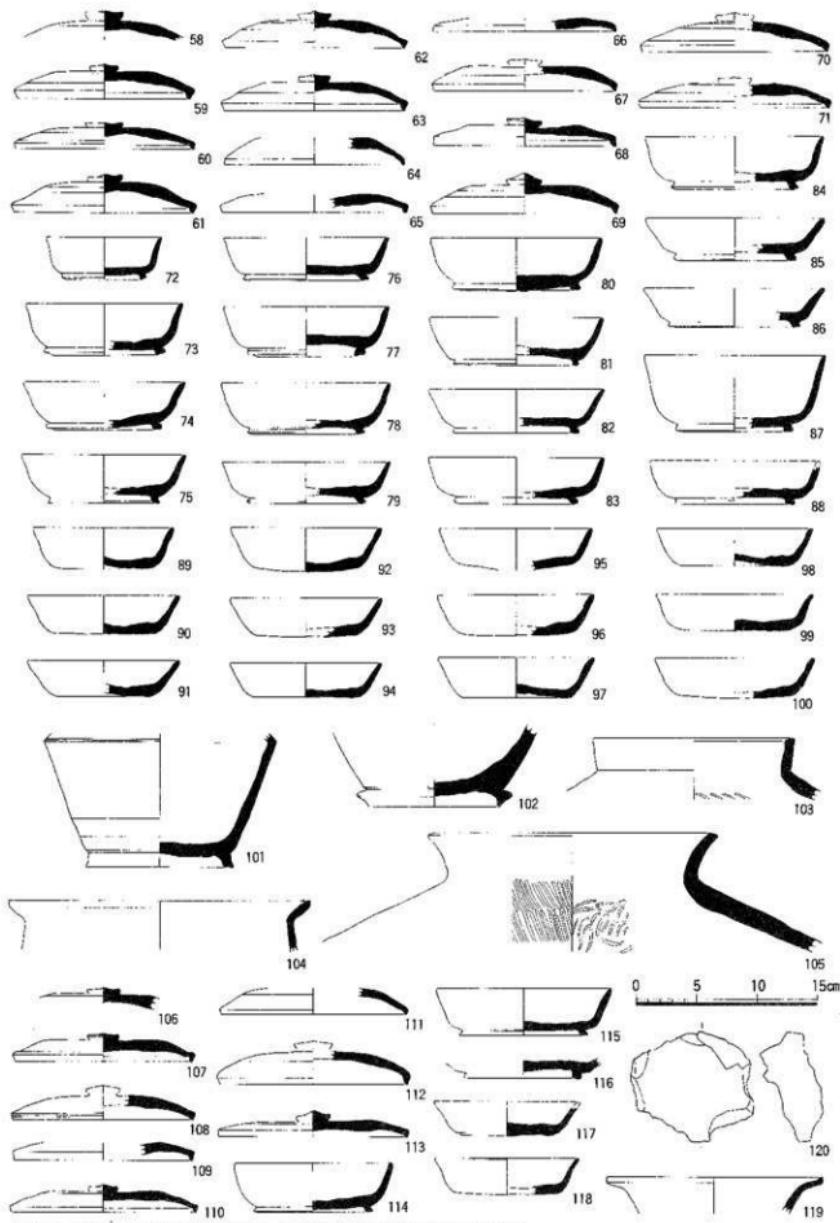
2~4号穴は1・2号窯の間に位置し、2号窯窯体を一部分破壊して構築される。穴はそれぞれ連結しており、底面の高さも一定ではない。下方から数回にわたって掘り込まれたものと推定され、4分穴の一部が最も新しい。4分穴覆土からは杯Aが22点、杯Bが1点の計23点が入子状に重ねられた状態で投棄されていた。これらには、底部または口縁部に亀裂が入っており、失敗品を一括投棄したものである。

穴の覆土は、黄褐色土、黒褐色土が複雑に入り込み、3・4分穴覆土上面からは還元、酸化窯壁まじり土が入り込むことなどから、これらの穴は1号窯の補修採土穴と推定される。

-26.20



第9図 1号窯実測図



第10図 1号窯・造構上面出土遺物
58~86·88~94·97~100·102·103·105、1号窯床面
87·95·96·101·104、1号窯壇上 106~120、六新造構上面

2号穴出土遺物（第12図128～154）

2号穴からは、杯B蓋・杯B・杯A・杯C・杯D・長頸壺・壺、鉄滓などが出土した。

杯BⅢ蓋（128～132）口径14.6～16cm。頂部外面は全て右まわりロクロ削り。縁端部外面には凹線状のくぼみをめぐらすもの（129・131）がある。

杯BⅢ（133～137）口径12.8～14cm、高さ4.1～4.3cm。口縁部は直線的に立ちあがるもの（133・135～137）が多い。高台は底部端に付き、低く外方にふんばる。底部外面はロクロ削り（137）、ヘラ切り、丁寧なロクロナデ（133）がある。

杯AⅢ（138～145）口径11.8～12.4cm、高さ2.8～3.45cm。底部は丸味をもつもの（141・145）、口縁部と底部の境にへラ入れ時の段を残すもの（139・144）がある。底部外面はヘラ切り、軽いナデ付け、内面は仕上ナデ調整が多い。

杯C（146・147）口径12.5～12.6cm。口縁部途中で大きく屈曲し、縁端部は上方にのびる。2点とも生焼品で、底部外面はヘラ切り。147は口縁部と底部の境にへラ入れ時の段を残す。

杯D（148）口径13.6cmの生焼品。口縁部途中で大きく屈曲し、外縁気味にのびる。底部内外面の調整は不明。

3号穴出土遺物（第12図155～184）

3号穴からは、杯B蓋・杯B・杯D・壺・土師器小型壺が出土した。

杯B蓋（155～168）155～167は、口径14.5～16.5cmのBⅢ蓋。BⅣ蓋（168）は、口径17.1cmで頂部内面は仕上ナデ調整。

杯B（169～176）BⅢ（169）は口径12.4cm、高さ7.6cm。底部外面は、ヘラ切り、ロクロナデ。BⅢ（170～175）口径13.2～14.2cm、高さ3.7～4.1cm。底部外面はヘラ切り、ロクロナデ、内面は、一方向のナデ調整が多い。

杯A（178・180～182）AⅠ（178）口径10.8cm、高さ4.3cm。底部外面はヘラ切り、軽いナデ付け。内面は、不定方向のナデ調整。AⅡ（180～182）口径12.2～12.9cm。

杯D（177）2号穴出土（148）とは高さが異なるが、一応含める。口径13.2cm、高さ4.4cmで、底部近くに1条の沈線がめぐる。底部外面はヘラ切り、軽いナデ付け。内面は仕上ナデ調整。

4号穴出土遺物（第13図185～229）

4号穴からは杯B蓋・杯B・杯A・長頸壺・広口壺・小型壺・鉢などの破片が出土した。

杯BⅢ蓋（185～190）口径14.8～16.3cm。186のつまみの最大径は2.4cmと小さい。189の頂部には2条2ヶ所の沈線。

杯B（191～193）BⅢ（191・192）口径11.5～12cm。高さは3.1～3.8cm。191の底部外面はヘラ切り、ロクロナデ。

BⅢ（193）は口径13.6cm、高さ8.3cm。底部外面はロクロ削り。

杯AⅡ（194～217）口径11.2～12.9cm、高さ3.3～4.15cm。底部は丸味をもつものが多い。

長頸壺（218・219・222～225）ラッパ状に開く長い口頭部を持ち、中ほどに沈線をめぐらす。218の口径は10.2cm。

広口壺（220・221）大きく開く口頭部に口縁部は軽く上方につまみあげ、220の口径は17.8cm。頭部の高さは9.6cm。

小型壺（226）口径9.4cm、高さ6cm。底部外面はヘラ切り、ナデ付け調整。

11号穴と出土遺物（第5図・第13図230～237）

調査地の南東端に位置する。穴は西側は破壊され、東側は調査区外に広がるため形状、規模は不明。北側地山面を約50cm掘り込み、平坦面を作る。覆土からは杯B蓋・杯B・土師器杯A・羽口・土師器壺などの破片が出土した。

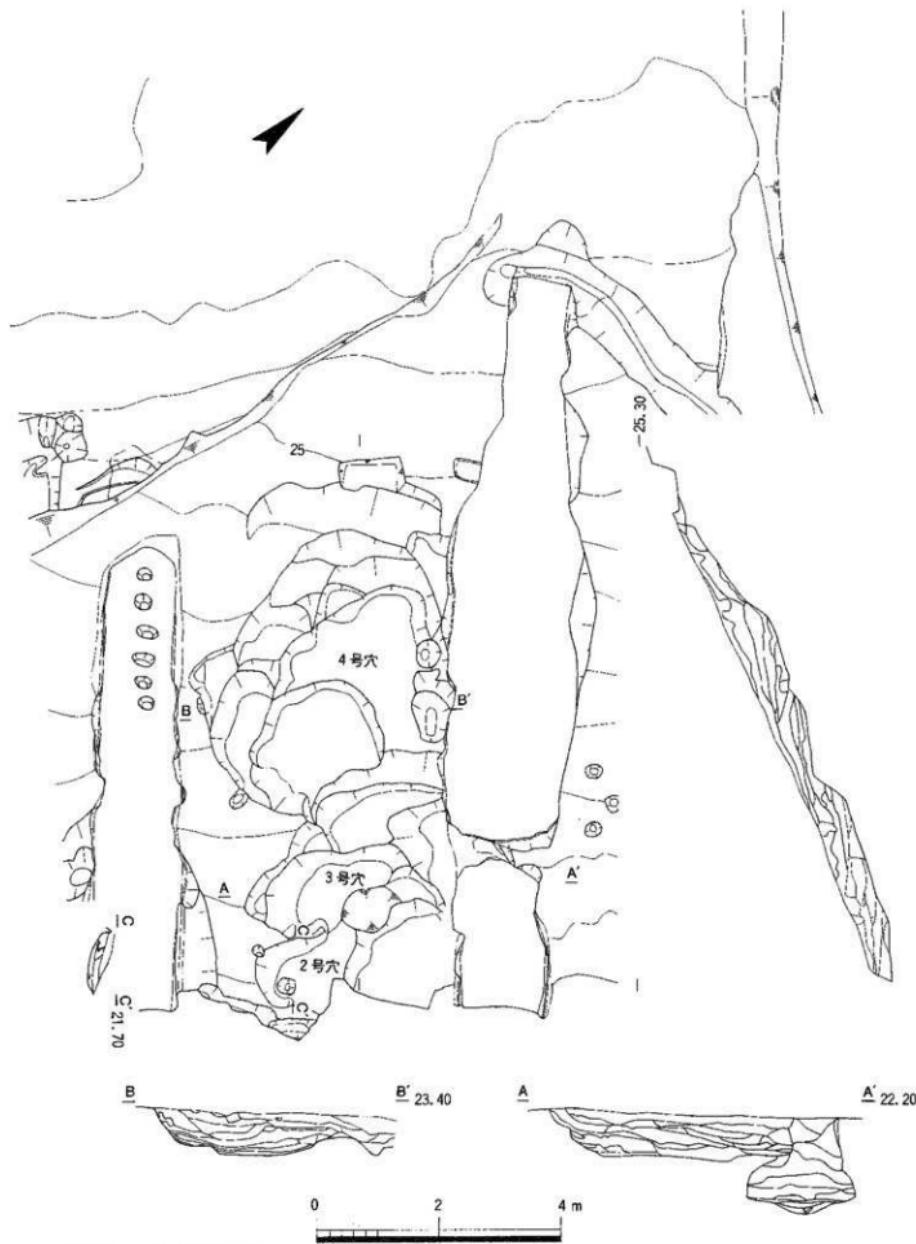
表掲遺物（第14・15図）

掘削上より多くの遺物が採取されている。全て1・2号窯焼成の須恵器である。

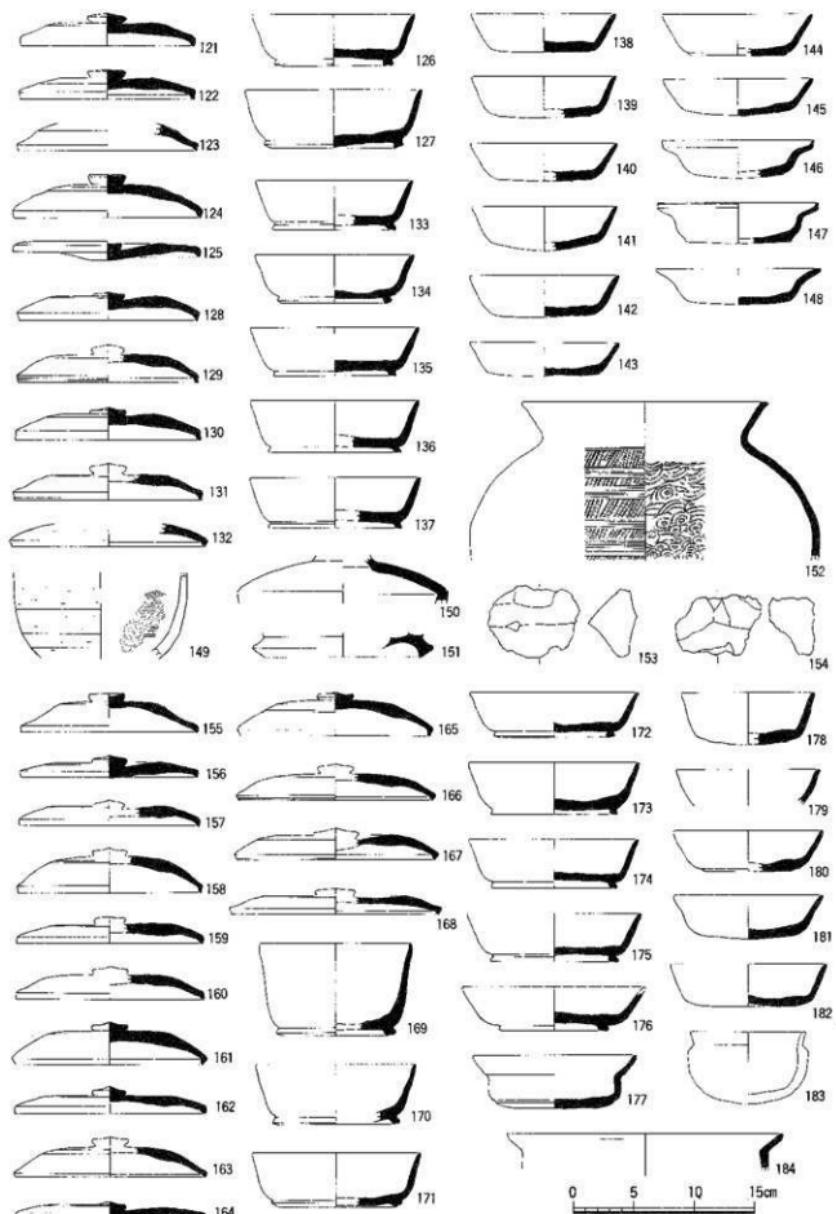
6西地区穴と出土遺物（第8図54～57、図版5の9）

1号窯から南西方向約70mの土取り崖面に露出している穴である。穴の形状、規模は不明であるが、覆土は多くの炭化物を含む。出土遺物（54～57）は杯蓋、杯の破片で、2号窯と同時期である。

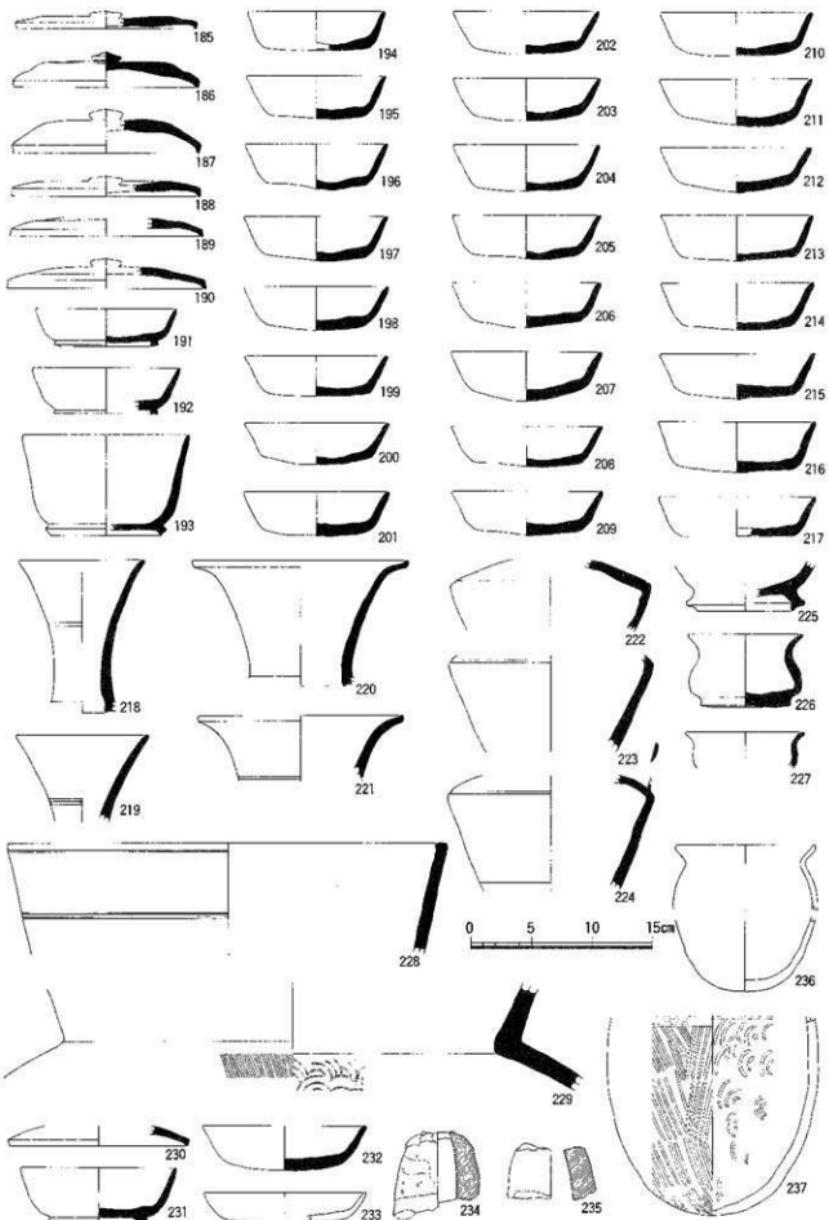
（池野）



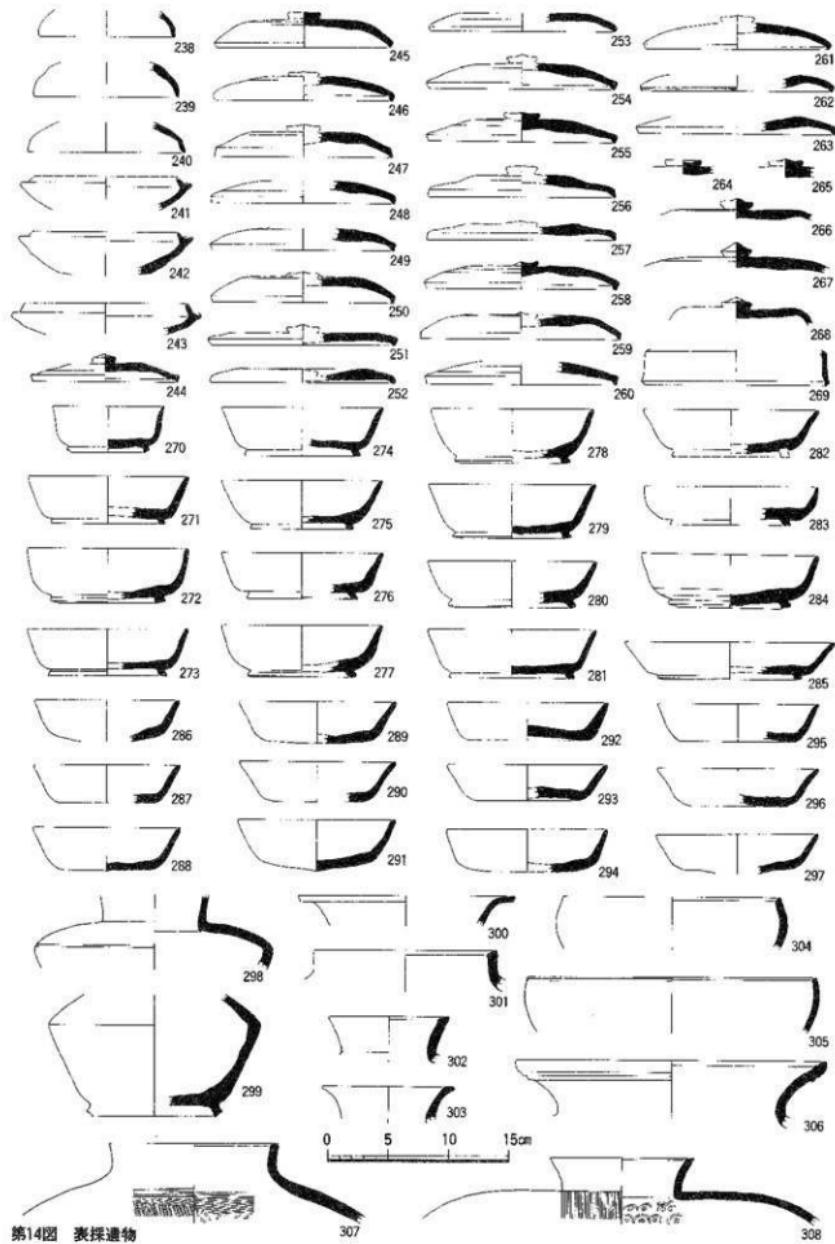
第11図 2・3・4号穴実測図



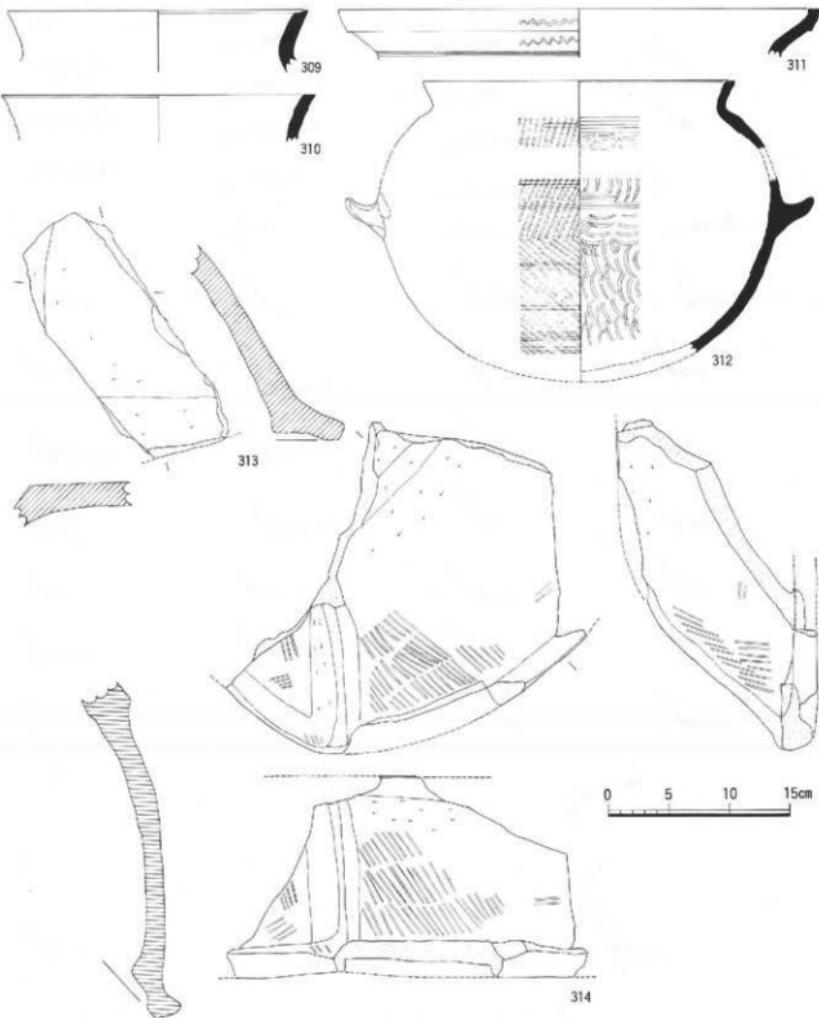
第12図 1・2・3号穴出土遺物 121-127. 1号穴 128-154. 2号穴 155-184. 3号穴



第13図 4・11号穴出土遺物 185-229. 4号穴 230-237. 11号穴



第14図 表探遺物



第15図 表採遺物

V 調査の成果

1 7世紀前半の須恵器

(1) 2号窯の出土遺物 (第6図1・2、第8図3-53)

2号窯出土の須恵器の器種には、杯蓋、杯、高杯、甕、提瓶、横瓶、壺、甕がある。調査対象地が窯体だけで、しかも、窯体の前庭部が削平されているため、遺物の出土量は少ない。

杯蓋A (3~14) 頂部が丸みをもち、内面にかえりのつかない蓋である。口径によってA I (11~12cm代)、A II (13cm代)、A III (14cm代) に分かれ、A IIが多い。口縁部内外面はロクロナデを、頂部外面はヘラキリのあとナデを、内面にもナデを行う。頂部外面のロクロケズリは1点 (7)だけである。器高は、3.5~5.0cmであり、4cm前後のものが多い。ロクロ方向は右回りである。30個体。

杯A (15~26) 蓋受けの立上がりをもつ身である。受け部の径によってA I (13cm代)、A II (14cm代)、A III (15~16cm代)に分かれ、A IIが多い。口縁部及び体部内外面はロクロナデを、底部外面はヘラキリのあとナデを、内面にもナデを行う。口縁部外面に沈線を巡らすもの (20)がある。立上がりは内傾して上方にのびるが、水平になるものも1点 (26)ある。器高は3.2~4cmのものがある。ロクロ方向は右回りである。25個体。

高杯 (27~38・42) 有蓋Aと無蓋Bがある。Aは杯Aを身にした形で杯部外面下半にロクロケズリを行う。A蓋 (27)は、凹状の紐がつき、杯部外面に浅い沈線が巡る。口径15.3cmである。Bは杯部の形態から2つに分れる。B:は杯部に凸帯が巡るもの。B:は杯蓋Aを身にした形をする。B:は口径12cm代、B:は口径14cm、17cmのものがある。脚部には透しがあるものとないものとがある。脚部は外反し、端部は崩曲する。17個体。

甕 (38) 口縁部は外彎ぎみに外ヒ方にのび、底部はケズリを行う。2個体。

提瓶 (43) 体部外面はカキメを、内面はロクロナデを行う。口縁部に沈線を巡らすものもある。3個体。

横瓶 図示しなかったが、体部外面にタタキのあとカキメを行い、内面にて具痕がある。3個体。

壺 (39) 口縁端部が少し肥厚して、内面に面取る。頭部から体部外面はカキメを、底部はケズリを行う。

甕 (1・2・40・41・45~48) 口縁端部は鋸るものと肥厚するものがある。後者は端部内面に面取るものと平坦なものがある。1・2は大型品で、焼き台として利用されている。4個体。

陶錘 (53) 完形の生焼け品で、窯体の先端部近くから出土。長さ11.5cm、直徑1.7cmで、4mmの穴があく。重さ13.8g。

その他 粘土塊に棒状のものを通した49、細長い長方体の一面を面取りした52がある。50・51は、内外面にタタキとて具痕があり、ヘラ状工具で直径12~14cmの半月形の円弧を描いている。厚さ7mm。小杉流山No.7遺跡の1号窯でも同様なものが出土している。土師器壺44は窯体の覆土から出土したもので、2号窯の櫛上の一端を切る3・4穴の遺物と考えられる。

表探遺物 (238~243) 2号窯の前庭部と一部灰層を削平した土から表探されたものである。杯蓋はA I (238・239)、A II (240)、杯はA II (241・242)、A III (243)がある。甕 (306)は口径25.6cmで、口縁端部が肥厚し、内面に棱線がある。陶棺 (313・314)は蓋の破片で、3点出土した。314は高さ21.5cm、厚さ2cm前後で、幅は不明である。内外面にタタキのあと、ケズリとナデによって仕上げられているが、外側にタタキのあとがわずかに残っている。周縁部はやや肥厚し、その内面を面取りし、棺身を受けるための段が巡っている。313は314と同じ蓋の一部と考えられる。

以上、2号窯の出土遺物を要約すると以下の点になる。①調査が窯体だけのため、遺物の出土点数も少なく、器種全体を網羅されていない。②杯蓋A I ~ A IIIと杯A I ~ A IIIはそれぞれセットになり、A IIが主体を占める。頂部及び底部の外面はヘラキリのあとナデを行なうが、ロクロケズリのものは1点ある。ロクロ方向は右回りである。③杯蓋Bは出土していない。④高杯はA・Bあり、脚部に透しのあるものもある。⑤土器以外に陶棺(後述)、陶錘、用途

不明品など特注品から種々複雑なものまで焼かれている。

(2) 上野遺跡第Ⅱ台地の8号住居跡(第17図1~52)

小杉町上野遺跡は本遺跡と同じ射水丘陵の先端部に立地し、先上器時代から近世に及ぶ大規模な遺跡である。遺構・遺物は第Ⅰ~第Ⅳ台地のすべてから検出された。このうち、第Ⅳ台地の8号住居跡出土の一括品を図示した。遺物には牛焼け品や焼けひずみのあるものがある。

杯蓋A (1~12) 口径によってA I (11~12cm代)、A II (13cm代)、A III (14cm代)に分かれ、A IIが多い。器高は3.4~4.6cmで、4cm前後のものが多い。口縁部内外面はロクロナデを行い、頂部外面はヘラキリのあとナデを行う。ロクロ方向は右回りである。

杯A (13~34) 受け部径によってA I (12~13cm代)、A II (14cm代)、A III (15cm代)に分かれ、A IIが多い。器高は14以外は3.0~4.2cmで4.0cm前後が多い。口縁部内外面はロクロナデを行い、底部外面はヘラキリのあとナデを、内面はナデを行う。8だけ口縁部下半(1/5)以下底部まで丁寧にロクロケズリを行う。ロクロ方向は右回りである。

杯B (36~39) 器高の高い楕円形の身で、口径は10~11cmである。体部外面に沈線があるものとないものがある。前者は体部から底部にかけてロクロケズリを行い、後者はロクロナデだけである。37の器高は5cmである。

その他 高杯(46~47)、鉢(40)、横瓶(48)、平瓶(43)、器台(42)、台付壺(41~50)、短頸壺(51)、壺(49~52)がある。

(3) 小杉流図No.6 遺跡の東地区出土遺物(第18図1~46)

No.6 遺跡は本遺跡から約500m南にある古墳時代の集落跡である。この遺跡の東斜面地及び土器溝(X10列以北Y17列以東の部分にあたり、ここでは東地区と仮称する)には、遺構がほとんどなく、遺物は包含層から検出された。

杯蓋A (1~10) 口径によってA I (10~11cm代)、A II (12cm代)、A III (13~14cm代)に分かれ、A IIが多い。器高は3.2~4.7cmで4cm前後が多い。頂部外面はヘラキリのあとナデを、内面はナデを行う。ロクロ方向は右回りである。

杯蓋B (25~35) 壺内面のかえりが口縁部から下に出るもので、乳頭状の紐のあるもの(B_a)とないもの(B_b)がある。B_aは頂部外面の1/2以下をロクロケズリを行う。B_bは頂部外面をヘラキリのあとナデを行う。B_aとB_bはかえりの形態も違う。B_aは杯Aを逆転させたようで、B_bはかえりと

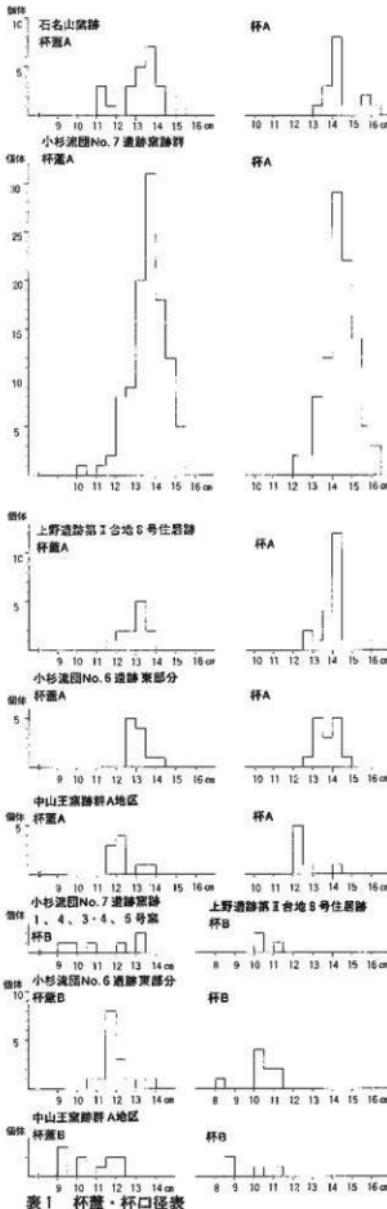


表1 杯蓋・杯口径表

杯Aは受け部径を測る

口縁端部の間が1~1.5cm前後とBより広い。Bは口径によってB:I (10.6~11cm)、B:II (11.6~12.5cm)に分かれ、B:IIが多い。B:IIは口径が11.6~12.5cmである。B:I・B:IIとも器高は2.3~2.5cmである。ロクロ方向は右回り。

杯A (11~24) 底部外面はヘラキリのあとナデを行う。受け部径によってA:I (12~13cm代)、A:II (14cm代)に分かれ、A:IとA:IIは同じ割合である。器高は3.1~4.5cmで、3.5cm前後のものが多い。

杯B (36~39) 体部外面に沈線が巡る。沈線以下底部までロクロケズリを行う。口径によってB:I (8cm代)、B:II (10~11cm代)に分かれ、B:IIが大部分である。器高は5.2~5.5cmである。杯蓋Bとセットになると考えられる。

その他 高杯はA (46)、Bあり、脚部は短い。短頸壺、台付壺、鉢、横瓶、提瓶、平瓶、罐などがある。

(4) 中山王窯跡群A地区の出土遺物 (第18回47~72)

上市町中山王窯跡群は県東部にある遺跡で、B地区には7世紀末の瓦陶兼業窯がある。A地区は山腹に走る用水路の改修に伴って窯の灰層が2ヶ所確認された。¹¹³ それぞれ46~54と55~72の遺物が出土した。ここでは前者を1群、後者を2群と仮称する。1群と2群は浅い谷で分かれ。1群は窯が1基と考えられるが、2群は遺物に時期幅があり、窯の数は不明である。

1群 (47~54) 遺物量が少なく、器種のバラエティーは把握できないが、杯蓋Bは出土していない。杯蓋A・杯Aとも口径12cm前後のものが目立つ。器高は47が3.6cmだが、49・50が3cm以下になる。頂部及び底部の外面はヘラキリのあとナデを行い、内面はナデを行う。杯Aの立上がりも短くなる。杯Bは作りがやや厚い。口径は8.5cm、9.8~10.9cmであり、器高も5cm前後である。高杯は脚部が外反して開き、2段透しのものもある。

2群 (55~72) 杯蓋A・杯Aは口径12cm前後のものが目立つ。56の頂部外面はロクロケズリである。ロクロ方向は右回りである。杯Bは作りが厚いものと薄いものがある。口径は9~10.4cmで、沈線が巡るものがある。杯蓋Bは蓋内面のかえりが口縁端部より下に突出しないもので、紐が付き、頂部外面にロクロケズリを行う。

(5) 編年的位置

以上述べてきた杯蓋・杯の形態から上記の遺跡の位置づけを考えてみたい。

杯蓋A 本遺跡では口径13cm代、器高4cm前後のものが主体を占め、上野遺跡でも同様な傾向を示すが、No.6遺跡では口径12cm代と少し小さくなる。中山王窯跡群の1群は口径が少し小さくなり、立上がりも短くなる。

杯A 本遺跡では受け部径14cm代(口径12cm代)、器高4cm前後のものが主体を占め、上野遺跡でも同様な傾向を示すが、No.6遺跡では受け部径(口径も同様)も少し小さく、器高も少し低くなる。中山王窯跡群の1群でも同様に縮小化が図られる。

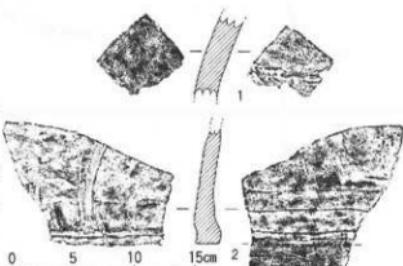
杯蓋B 本遺跡、上野遺跡では出土していないが、No.6遺跡では見られる。中山王窯跡群1群では遺物量が少なかつたため検出されていないが、杯蓋Bを伴う時期と考える。

杯B 本遺跡では出土していないが、上野遺跡では口径10.5~11.5cmが多く、No.6遺跡や中山王窯跡群1群でも同様な傾向を示している。杯Bは杯蓋B以前に出現し、

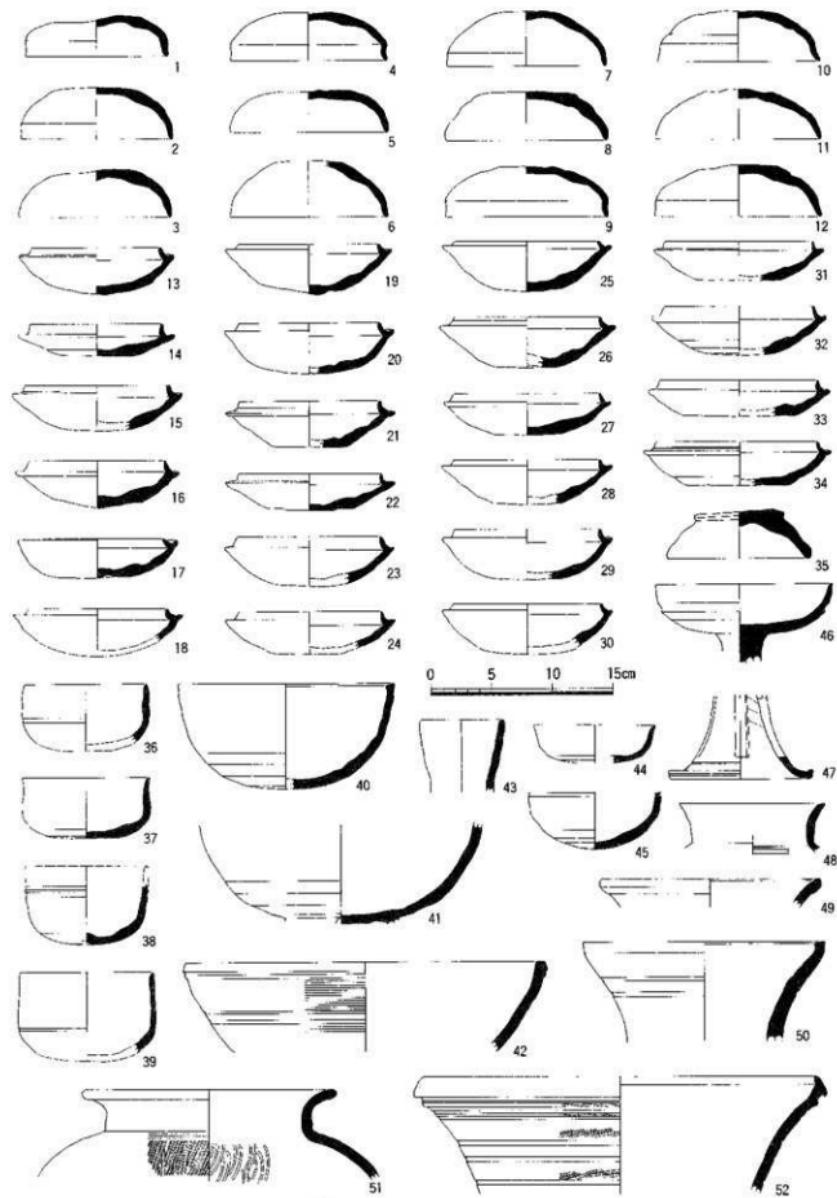
No.6遺跡では杯蓋Bとセットになると考える。

以上の杯蓋・杯の推移から、本遺跡2号窯、上野遺跡8

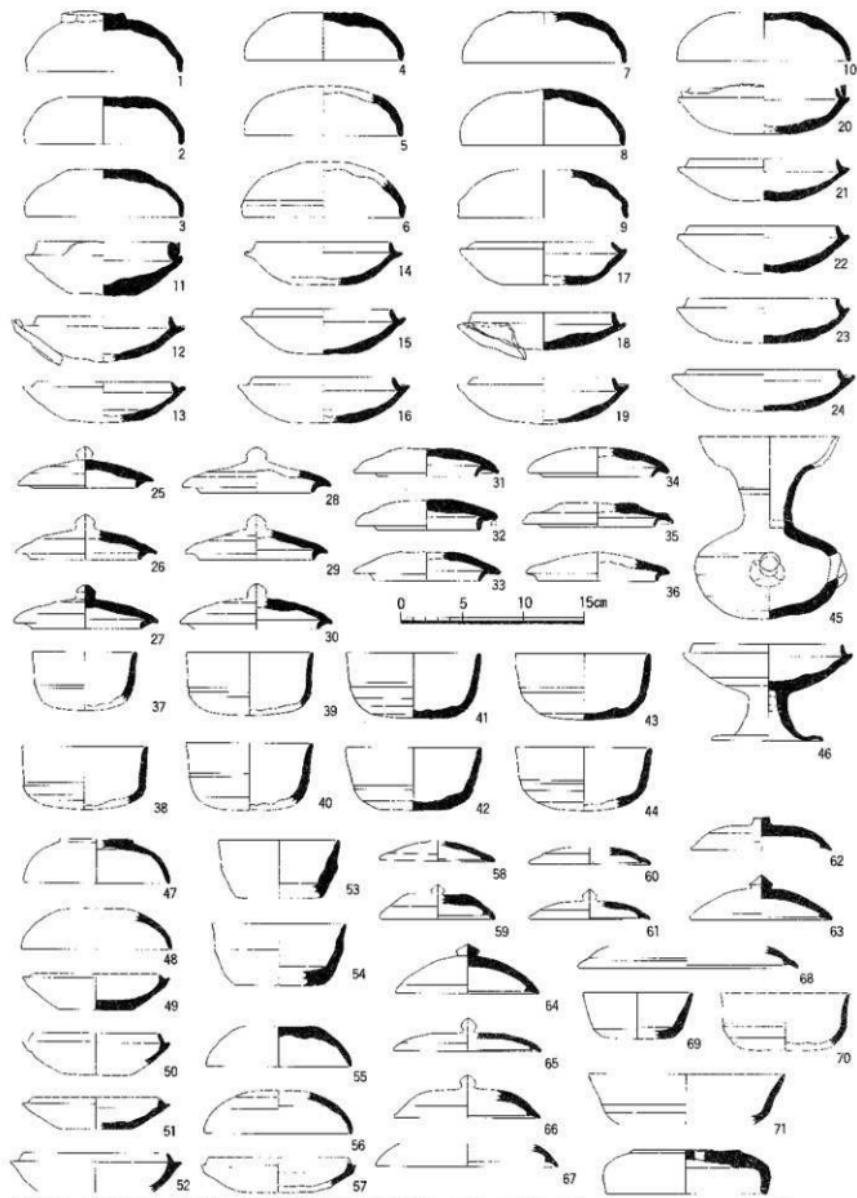
号住居跡→No.6遺跡東地区→中山王窯跡群A地区1群と新しくなると考えられる。上野遺跡8号住居跡の14のように器高が低く、ロクロケズリの杯Aは、受け部の作りからNo.6遺跡の杯蓋Bに類似し、杯蓋B出現直前の1群相を示している。また、No.6遺跡での杯蓋Bの2形態の存在は、試行錯誤の一様相を示すものと考えられる。



第16回 陶器実測図 1. 小杉流田No.6遺跡 2. 平岡窯跡



第17図 上野遺跡第Ⅱ台地8号住居出土遺物



第18図 小杉流団No.6遺跡・中山王塚跡群A地区出土遺物
1~46: 小杉流団No.6遺跡
47~72: 中山王塚跡群A地区

ところで、本遺跡とその約550m南西にある小杉流団No.7 遺跡1～5号窯を比較してみる。No.7 遺跡の杯蓋Aは口径13cm代が、杯Aは受け部径14cm代(口径12cm代)が主体を占める。杯蓋、杯ともヘラキリのあとナデ調整がほとんどで、ロクロケズリは数点である。杯Bも数点出土し、底部外面にロクロケズリを行う。ロクロ方向は右回りである。高杯はA・Bともあるが、No.6 遺跡の46のような短脚のものはない。以上の特徴から、本遺跡2号窯と小杉流団No.7 遺跡1～5号窯は同じ時期と考える。

さて、畿内の7世紀の須恵器は飛鳥第I～V期に分類されている。第I期は杯蓋A・杯Aが主体を占めるが、一部に杯蓋Bを含む。杯蓋A・杯Aは口径14cm前後で、器高4cm前後である。杯蓋Bは口径10～11cm前後で、乳頭状の紐が付くという特徴がある。¹¹⁵この点を踏えて上記の県内の須恵器の年代は、以下のようになる。本遺跡2号窯、小杉流団No.7 遺跡1～5号窯、上野遺跡8号住居跡の出土遺物は杯蓋A・杯Aが主体で、杯蓋Bを含まない点と口径から、飛鳥第I期の前半にあたり、7世紀初頭の年代が考えられる。No.6 遺跡東地区の遺物は、杯蓋Bを若干含んでいる点と杯蓋A・杯Aの口径から、飛鳥第I期の後半にあたり、7世紀第I四半期の後半が考えられる。しかし、杯蓋Bの口径が第I期より大きい点からやや古い様相を示すものか。中山王室跡群A地区1群は第II期にあたり、7世紀第2四半期と考える。杯蓋A・杯Aの口径は第II期のSG100の杯(口径10cm、10.7cm)¹¹⁶と比較するとやや大きく、第II期でも古い方に属するのであろうか。

2 陶棺について

陶棺は表採品なので、1・2号窯のいずれかに属するものは決めがたい。しかし、石川県金比羅山窯跡などの7世紀前半の出土例などから、2号窯で焼かれたものと考えておく。県内では小杉流団No.6 遺跡の東地区から1点(第16図1)出土している。小破片なので明確でないが、器厚2cm前後で、外面にタタキ、内面にあて具痕の上からケズリを行う点や焼成、胎土から、陶棺の蓋(?)の一部と考えたい。また、2は平岡窯跡の採集品(後述)である。器厚は1.3cm前後で、内外面はナデを行う。端部は面取る。陶棺の蓋の破片になれば、7世紀第4四半期から末のものである。¹¹⁷(宮田)

3 7世紀末から8世紀前半の須恵器

(1) 1号窯及び周辺穴出土遺物

1号窯及び周辺穴出土須恵器を一括して扱う。器種には杯B蓋、杯B、杯A、杯C、杯D、壺蓋、長頸壺、広口壺、横瓶、鉢、甕などがあり、杯B蓋、杯B、杯Aが大部分を占める。

杯B蓋 全体が厚作りでシャープさを欠く。頂部は平坦でスムーズに傾斜して縁部に至るものが多く、笠状の高いものは無い。頂部外面は全て右まわりロクロ削りが施され、丁寧なものは縫部近くまで施す。縁端部外面に凹線状のくぼみがめぐらものが少量ある。

口径によって杯BⅡ蓋(口径12cm)、杯BⅢ蓋(口径14～16.5cm)、杯BⅣ蓋(口径17.1cm)に分ける。出土量は杯BⅡ蓋、杯BⅣ蓋が各1点、杯BⅢ蓋が70点ある。杯BⅡ蓋の頂部内面は中心部までロクロナデ調整する。つまみの最大径は1.9cm。杯BⅢ蓋の頂部内面の調整には、一方向のナデ12点、不定方向にナデたものの12点、中心部を指先で仕上ナデしたもの10点、中心部までロクロナデのもの1点がある。つまみの最大径は、2.4～3.1cmで、中央部がわざわざに高くなるものが多い。杯BⅣ蓋の頂部内面は指先による仕上ナデ。

杯B 口縁部が直線的に外傾するものと、途中で傾斜を変えるものがあり、後者が多い。高台の位置は、口縁部と底部の境からわずかに内側に付くものが多く、境近くに付くもの(133・137)、大きく離れるもの(176・283)も少量ある。低くわずかにふんばる高台が一般的で、端部は外端部があがるもの、平坦なもの、口端部があがるものがある。

法量によって杯BⅠ(口径9.1～9.4cm、高さ3.5～3.8cm)、杯BⅡ(口径11.5～12cm、高さ3.1～3.8cm)、杯BⅢ(口径12.6～14.8cm、高さ3.1～4.9cm)、杯BⅣ(口径12.4～14.8cm、高さ6.3～8.3cm)、杯BⅤ(口径17.4cm、高さ3cm)に分ける。出土量は、2・2・45・3・1点をそれぞれ数える。杯BⅠの底部外面はヘラ切り。杯BⅡの底部外面はロク

口削りとヘラ切り、ロクロナデ調整があり、内面は一方向のナデ調整する。杯BⅢの底部外面はヘラ切り、ロクロナデ調整が大部分で、ロクロ削りは3点のみである。284は底部外周から口縁部下半をロクロ削りする。内面は一方向のナデ12点、指先による仕上ナデ9点、不定方向のナデ4点がある。径高指数は30前後が多い。杯BⅣの底部外面はロクロ削り調整が2点ある。杯BⅤは底部外面ヘラ切り、内面不定方向のナデ調整。

杯A 平底、丸底があり、前者が多い。口縁部と底部の境にヘラ入れ時の段を有すものが少量ある。

法量によって杯AⅠ（口径10.8cm、高さ4.3cm）、杯AⅡ（口径11.2~13.4cm、高さ2.8~4.2cm）に分ける。出土量は、1~61点をそれぞれ数える。杯AⅠの底部外面はヘラ切り、軽いナデ付け、内面は不定方向のナデ調整する。杯AⅡの底部外面はヘラ切り、軽いナデ付け、内面は中心部までロクロナデ及び指先による仕上ナデが大部分で、一方向のナデ調整したもののが2点のみ。径高指数はばらつきが大きいが26~31が大部分を占める。

杯C 特殊な形態の無高台杯で2点出土。2点とも生焼品で、器面は風化して明確でないが、底部外面は、ヘラ切り未調整と推定される。

杯D 杯Cと同様に口縁部途中で屈曲し、大きく外傾する形態の無高台杯。2点あり、両者の器形は若干異なるが一括して扱った。177の底部外面はヘラ切り、軽いナデ付け。

壺蓋 表採品の中に2点ある。破片で全体を知りえないが、なで肩と肩の張るものがある。269の縁端部の形態は、外端部があがり先端は尖る。

長頸壺 外傾して長くのびた口縁部の中ほどに沈線がめぐる。高台は外端部があがり、ふんばる。

広口壺 破片のみ。口縁端部はわずかにつまみあげられた形態で丸味をもつ。101の高台の外端部はあがらず、直線的にのびてふんばる。

横瓶 表採品の中に3点ある。口縁端部が内傾するもの（302・308）、平坦なもの（303）がある。口径9.8~12cm。

鉢 表採品の中に鉄鉢が2点ある。口縁端部が内傾し、305の外面に沈線がめぐる。口径23.6cm。

甕 土師器壺の形態を模したものと、把手付甕がある。前者は頸部で屈曲し、口縁端部は丸くおさめる。内外面ロクロナデ。把手付甕は、表採品で、口径25.4cmに縁端部はわずかに内傾し、体部外面にタタキメ、カキメ、内面にアテ具痕、カキメを残す。

以上記述した内容を要約すると、

1. 調査は窯体内及び窯体横に位置する穴のみである。従って、出土須恵器が1号窯焼成器種を網羅しているかどうかの問題を残す。

2. 1の問題があるが、焼成器種には、杯B蓋、杯A、杯B、杯C、杯D、壺蓋、長頸壺、広口壺、横瓶、鉢、甕がある。量は杯B蓋、杯B、杯Aの杯蓋類が大部分を占めるが、他の器種も一定量焼かれる。

3. 杯B蓋は杯BⅢ蓋、杯Bは杯BⅢ、杯Aは杯AⅡを中心にして焼かれ、他は少量である。

4. 杯BⅢに高さによる器種分化が認められる。

5. 金属器を模した杯蓋、杯類は見られない。

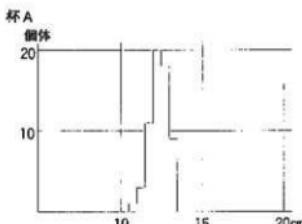
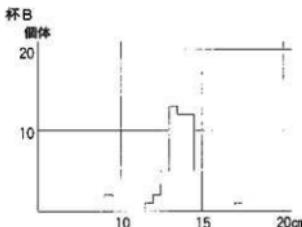
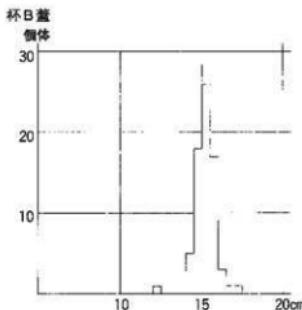


表2 杯蓋・杯口徑表

(2) 射水丘陵窓跡との比較

射水丘陵窓跡のうち、比較的様相の近い平岡窓跡、小杉流団No.16遺跡1・2号窓跡を取り上げてみる。

① 平岡窓跡

平岡窓跡は石名山窓跡とは直線距離で南東方向6kmの射水丘陵東端に位置する。本調査窓跡で用水壁面に20~30mにわたって灰層が露出している。窓跡数は不明で、1~2基程度と推定される。

採取遺物 (第19図)

採取須恵器には、杯A蓋、杯B蓋、杯A、杯B、長頭壺、甕などの破片があるが、ここでは、杯A蓋、杯B蓋、杯A、杯Bを紹介する。

杯A蓋 (1~20) 縁部近くの内面にかえりをもつ蓋で、頂部は平坦でスムーズに縁部に至る。全ての頂部外面は右まわりのロクロ削りが施され、縁部近くはロクロナデされる。かえりの先端は、口縁端より下方にのびるものは1点のみで、その他は同一か、わずかに短い。かえりの形態は、バラエティーに富み、数種類に分かれれる。

口径によって杯AⅡ蓋 (1~12、口径10.8~14.4cm)、杯AⅢ蓋 (13~15、口径14.5~16.4cm)、杯AⅣ蓋 (16~18、口径16.8~18.4cm)、杯AⅤ蓋 (19~20、口径19.4~20.8cm) に分ける。量は、58・21・7・6点をそれぞれ数え、杯AⅡ蓋が6割を占める。杯AⅡ蓋のつまみの最大径は2~3cmのものがある。頂部内面調整は中心部までロクロナデするのが多く、指先による仕上ナデが少量ある。杯AⅢ蓋の頂部内面も中心部までロクロナデするものが多く、不定方向のナデを加えるものは2点のみ。つまみの最大径は2.5~2.6cm。杯AⅤ蓋の頂部内面調整には不定方向のナデを加えるものが3点あり、杯AⅤ蓋の56は中心部までロクロナデする。

杯B蓋 (21~41) 縁端部が下方に折れる蓋。平坦な頂部からスムーズに縁端に至るものと、高さがあり肩で稜をなすものの2形態があり、前者が多い。また、縁端部形態には、稜を明瞭にして折れるものと、単に折り曲げて丸味をもつものがあり、それぞれに先端が内傾、垂下、外傾したもののが含まれる。全ての頂部には右まわりのロクロ削りが施される。

口径によって杯BⅡ蓋 (21~28、口径11.4~13.8cm)、杯BⅢ蓋 (29~31、口径14~16.4cm)、杯BⅣ蓋 (32~39、口径16.8~19.4cm)、杯BⅤ蓋 (40~41、口径19.6~21.8cm) に分ける。量は21・27・66・5点をそれぞれ数え、杯BⅣ蓋が5割を占める。杯BⅡ蓋のつまみの最大幅は2.0~3.0cmのものがあり、頂部内面の調整は、中心部までロクロナデするものが多数を占め、指先による仕上ナデ、不定方向のナデが少量ある。杯BⅢ蓋になると、内面調整は不定方向のナデが6割を占めるようになる。つまみの最大径は2.8~3.1cm。杯BⅣ蓋の頂部内面調整は、不定方向のナデがさらに増え8割を占める。つまみの最大径は2.9~3.5cm。杯BⅤ蓋の内面調整も、不定方向のナデが多数を占める。

杯B (42~57) 外傾する口縁部に高台が付く杯。口縁部には直線的に外傾するもの、途中で外傾度を変え、さらに外掛気味にのびるもの、大きく弧を描いて直立気味になるものなどがある。高台は、口縁部と底部の境よりわずかに内側に付くのが一般的で、境近くに付くもの、大きく内側に入るものも少量ある。形態は太くて低く、外縁部があがるものが多い。底部は平坦で大きさがるものはない。

法量によって杯BⅠ (口径7.8cm、高さ4.3cm)、杯BⅡ (42~45、口径10.4~13cm、高さ3.6~4.8cm)、杯BⅢ (46~54、口径13.4~16.2cm、高さ3.5~5.0cm)、杯BⅣ (55、口径16.6~18cm、高さ3.5~4.8cm)、杯BⅤ (56~57、口径19~20cm、高さ4.2~5.1cm) に分ける。量は、1・7・32・12・3点をそれぞれ数える。杯BⅡの底部外面はヘラ切り、ロクロナデが多いが、44のように底部から口縁部下半までロクロ削りするものもある。内面調整は全てロクロナデ。杯BⅢの底部外面にはロクロ削り調整が2割程度含まれ、内面も一方向のナデ、不定方向のナデが多くなる。杯BⅣ、杯BⅤになるとさらにロクロ削りの割合が増え、内面調整も、不定方向のナデが多数を占める。

杯A (58~75) 無高台の杯。器形はバラエティーに富む。口縁部の傾斜は、外傾度の小さいもの、大きいものがあり、その中には直線的なもの、途中で傾斜を変えるものなどが含まれる。底部は平底に近いもの、丸底気味のものがあり、前者が多い。

法量によって杯AⅡ (58~74、口径10.2~14cm、高さ2.7~4.1cm)、杯AⅢ (75、口径15.2~16.5cm、高さ3.5~4.6cm)に分ける。量は、杯AⅡ 64点、杯AⅢ 2点である。杯AⅡの底部外面は全てヘラ切り、軽いナデ付け調整で、ロクロ削りを施すものはない。内面は中心部までロクロナデするものが大部分で、わずかに指先による仕上ナデ、一方向のナデ、不定方向のナデがある。杯AⅢの底部外面もヘラ切りで、内面は不定方向のナデ、指先による仕上ナデが施される。

以上記述した内容を要約すると、

1 杯A蓋、杯B蓋の比率は、採取遺物という前提で、大略1対2~3程度で、杯B蓋が多い。杯A蓋は杯AⅡ蓋から杯AⅤ蓋までみられるが、杯AⅡ蓋を中心で焼成する。杯B蓋も同様に杯BⅡ蓋から杯BⅤ蓋まであり、杯BⅣ蓋を中心で焼成し、両杯蓋は焼く主体の口径を異にする。

2 杯A蓋の頂部内面調整は、中心部までロクロナデするものが多く、杯AⅢ蓋、杯AⅣ蓋に少量の不定方向のナデがみられる。これに対して杯B蓋は、杯BⅡ蓋以外は不定方向のナデが多数を占める。

3 杯Aには杯AⅡと杯AⅢがあり、杯AⅡを中心に焼く。この杯Aとセット関係にある杯A蓋にはそれ以上の口径のものが認められることから、少なくとも杯AⅣ蓋、杯AⅤ蓋は杯BⅣ、杯BⅤとセットになるであろう。

4 杯Bには杯BⅠから杯BⅤまで認められるが、高さに大きな差ではなく、口径差だけであり、高さによる器種分化は認められない。

②小杉流団No.16遺跡2号窯

¹¹¹⁹ 昭和54年県教委が調査した。窓体は操業途中で大改修されており、操業当初の窓体を2号窯-Iと呼ぶ。2号窯-I

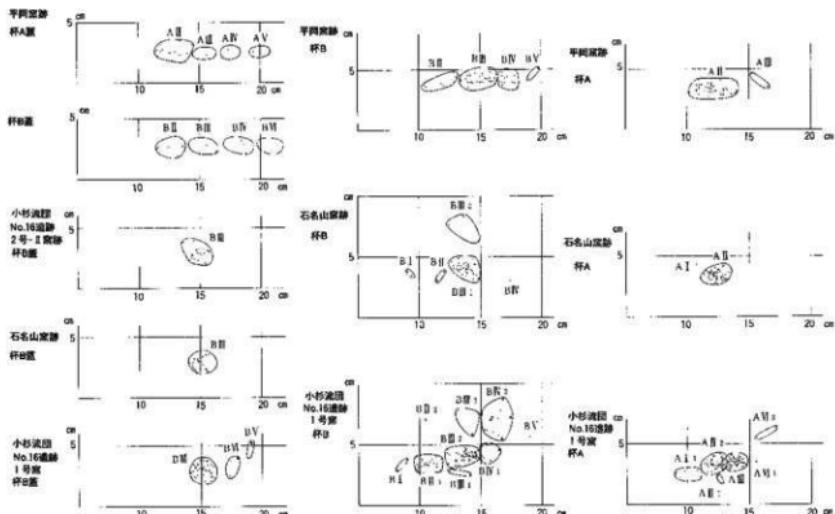
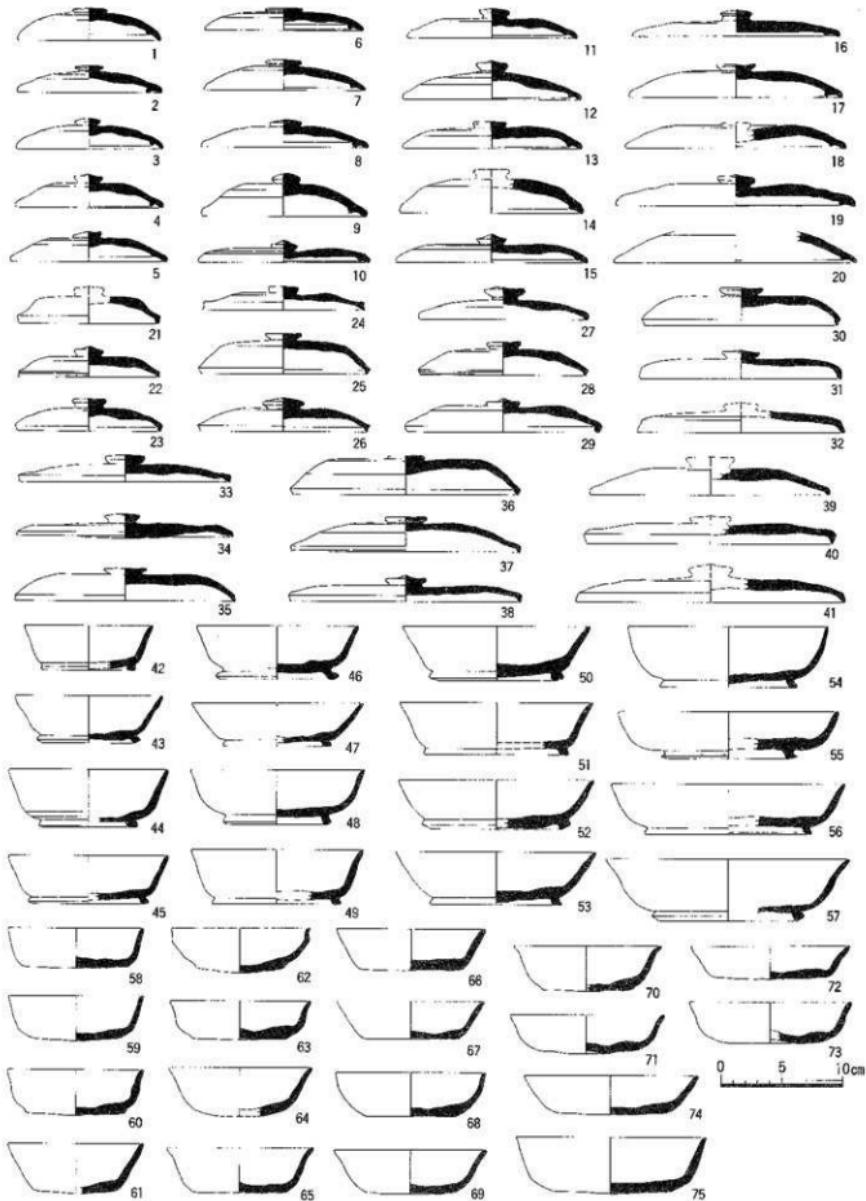


表3 法量表(▲は沈線をめぐらす杯蓋・杯)



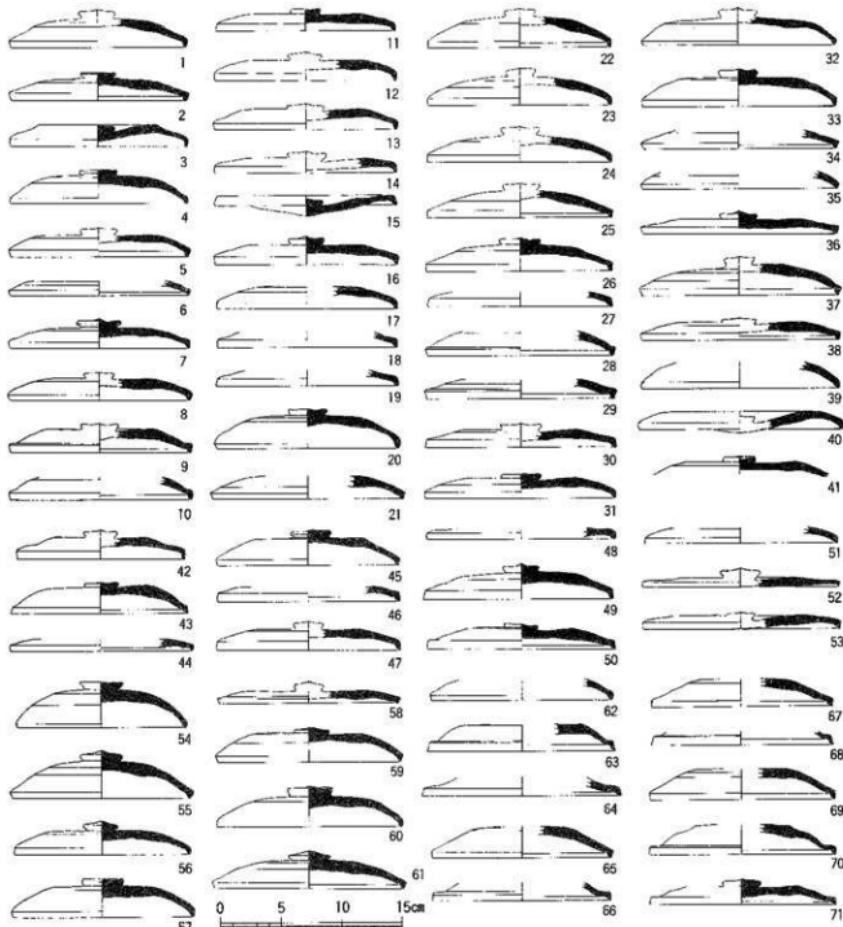
第19図 平岡窯跡採取遺物

IIの焚口から燃焼部にかけての側壁周辺を掘削し、その掘削土で床面を埋め、前庭部とする。この結果、窓体規模は当初に比べて2.5m縮小して操作を再開する。これを2号窓-IIと呼ぶ。ここで紹介する器種は杯B蓋のみである。

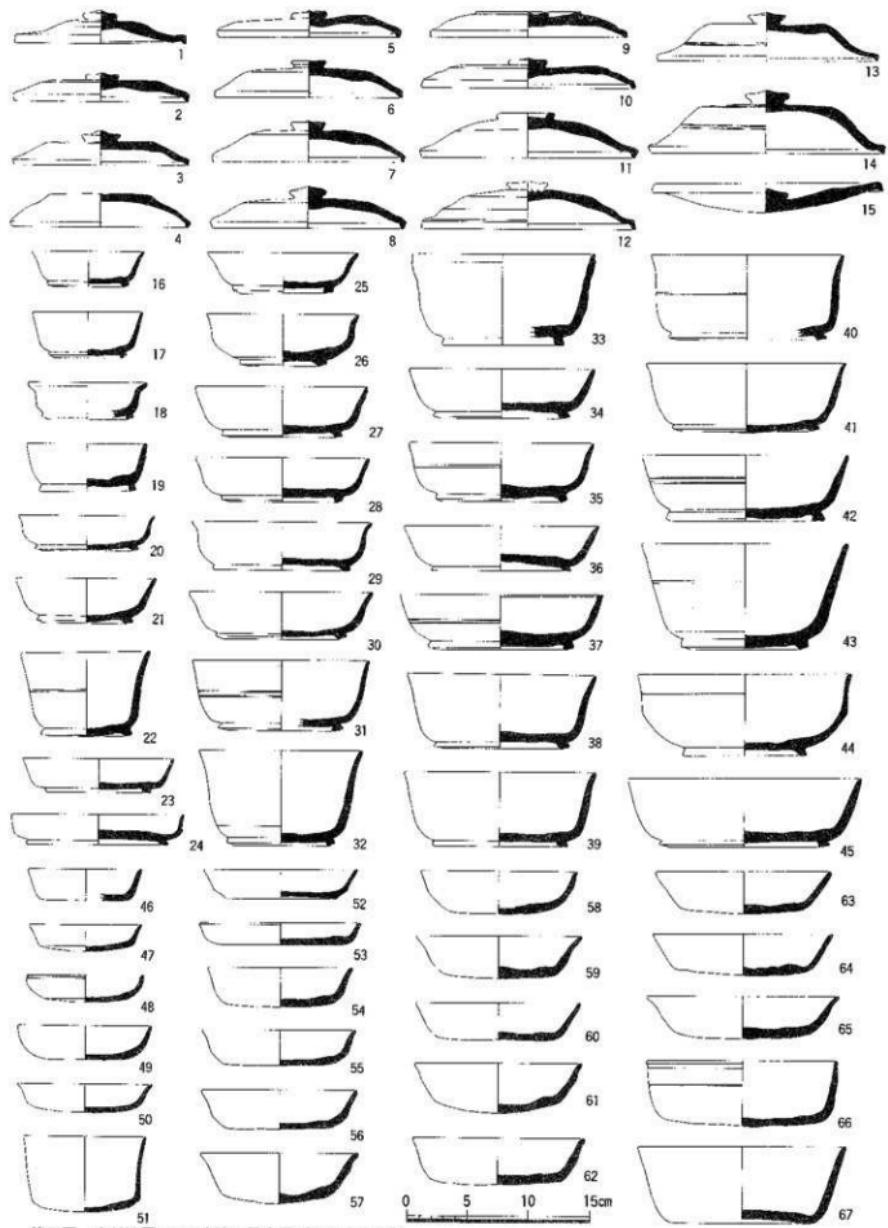
2号窓-II出土遺物 (第20図1~61)

2号窓-IIの出土遺物には、埋土下の最終床面(1~41)、3本の排水溝(42~53)、灰層及び周辺(54~61)などがある。

杯B蓋 杯B III蓋(口径13.6~16.5cm)のみ。平坦な頂部からスムーズに縁部に至るものと、肩がはるものがあり、前者が多い。縁端部の稜は明瞭なものが多く、単に折りまげて丸味を持ち、端部を挽き出すものが少量ある。頂部外



第20図 小杉流団No.16遺跡2号窓-I・II出土遺物
1~41. 2号窓-II最終床面 42~53. 2号窓-II排水溝 54~61. 灰層及び周辺
62~64. 2号窓-I窓口 65~71. 2号窓-I最終床面



第21図 小杉流団No.16遺跡1号窯及び周辺出土遺物

面は全て右まわりのロクロ削りが施される。内面調整は、中心部までロクロナデされるものが最も多く13点、一方向のナデが11点、不定方向のナデ5点、指先による仕上ナデが5点ある。つまみの最大径は、2.5~3.7cmのものがあり、大型が多い。形態は中央部がわずかに高くなるものと、平坦なものがある。

2号窯—I出土遺物（第20図62~71）

2号窯—Iの出土遺物は、焚口及び最終床面出土遺物である。

杯B蓋・杯B皿蓋（口径14.5~16.1cm）のみ。平坦な頂部から肩がはって縁部近くに至る。縁部は屈曲して水平にのび、奈文研でいうA形態が多くなる。63・68は薄く続く仕上げられたものである。頂部外面は、右まわりのロクロ削りを施す。ただし、70はヘラ切り、ロクロナデ調整。71の内面調整は中心部までロクロナデ。

③小杉流団No.16遺跡1号窯跡

昭和58年に県教委が調査した。^{注11} 2号窯跡の東方向約45mに位置する。灰層及び周辺部からは整理箱で300箱以上の膨大な量の遺物が出土している。

1号窯及び周辺遺構出土遺物（第21図1~67）

杯B蓋・杯A・杯B・皿・高杯・長頸壺・広口壺・短頸壺・横瓶・鉢・盤・壺・硯など多くの器種が出土している。1号窯も2号窯と同様に操業時間幅を考慮する必要があるが、未整理段階であるので一括した。ここでは、杯B蓋・杯B・杯Aを紹介する。

杯B蓋（1~15）平坦な頂部からなだらかに縁部に至るもの、肩で棱をなすもの、肩に突帯をもつもの、環状のつまみをもつもの、つまみが付かないもの、頂部外面に沈線がめぐるものがあり、縁部形態には、A形態も認められる。頂部外面は、右まわりのロクロ削りが施される。ただし、つまみがつかない4は、ヘラ切り未調整である。

口径によって、杯B皿蓋（1~9、口径14.1~16.3cm）、杯B皿蓋（10~13、口径17.3~18.0cm）、杯BⅤ蓋（14~15、口径18.8~19.1cm）に分ける。杯B皿蓋が最も出土量が多く、頂部内面の調整は、中心部までロクロナデが4割、指先による仕上ナデが3割を占め、他に一方向のナデ、不定方向のナデがある。杯BⅣ蓋には、頂部外面に沈線をもつものがあり、内面調整は、中心部までロクロナデが半分を占める。杯BⅤ蓋も同様で、14の高さは5.25cm、つまみの最大径は3.6cmを測る。

杯B（16~45）外傾した口縁部に低くふんばった高台が付く。高台は、外端部がわずかにあがるものが最も多い。法量によって杯BⅠ（16~17、口径8.2~8.9cm、高さ2.9~3.8cm）、杯BⅡ（19~21、口径9.8~11.8cm、高さ2.8~4.0cm）、杯BⅢ（22、口径10.5cm、高さ7.0cm）、杯BⅣ（23~24、口径12.4~14.1cm、高さ2.5~2.8cm）、杯BⅤ（25~30、口径12.2~14.8cm、高さ3.1~4.7cm）、杯BⅥ（31~33、口径13.1~14.8cm、高さ5.8~7.8cm）、杯BⅦ（34~37、口径15~16.7cm、高さ3.7~4.9cm）、杯BⅧ（38~44、口径15.1~17.4cm、高さ5.45~8.7cm）、杯BⅨ（45、口径19cm、高さ5.65cm）に分ける。杯BⅠの17の底部外面はロクロ削り。杯BⅡの底部外面はヘラ切りが主体でわずかにロクロ削りを施すものがある。内面は中心部までロクロナデするのが主体を占める。杯BⅢは口縁部途中に1条の沈線がめぐり、底部外面の調整はロクロ削り。杯BⅣの底部外面調整にはヘラ切りとロクロ削りがある。高さが低く、右台皿とすべき器種かもしれない。杯BⅤは出土量が最も多く、口縁部に沈線をもつものが含まれる。底部外面は、ヘラ切りを主体に2割程度のロクロ削りが含まれる。杯BⅥの31の底部外面はヘラ切り調整。口縁部外面に沈線がめぐる杯BⅦの底部外面にはヘラ切り、ロクロ削り調整がある。内面は一方向のナデ、指先による仕上ナデが多い。杯BⅧには、口縁部外面に沈線をもつものの割合が多くなる。底部外面はロクロ削りが施されるものが多いが、ヘラ切りのものも存在する。杯BⅨの底部外面はヘラ切り。

杯A（46~67）外傾した口縁部に平底及び丸底気味の底部をもつ無高台杯。

法量によって杯AⅠ（46~50、口径9.1~11cm、高さ2.2~2.8cm）、杯AⅡ（51、口径10cm、高さ6.2cm）、杯AⅢ（

(52・53、口径12.5~12.8cm、高さ1.8~2.4cm)、杯AⅡ(54~58、口径11.4~13.1cm、高さ2.65~4.2cm)、杯AⅢ(59~64、口径13.2~14.2cm、高さ2.95~4.1cm)、杯AⅣ(65、口径15.5cm、高さ3.5cm)、杯AⅤ(66~67、口径15.5~17.0cm、高さ5.5~6.3cm)に分ける。杯AⅠには器形の異なるものも含み、細分の可能性を残す。48の底部外面はロクロ削り。杯AⅠの底部外面はヘラ切り。杯AⅡの高さは低く、皿とすべき器種かもしれない。杯AⅢは最終床面上に残された焼成不良品であり、灰層及び周辺からの出土はほとんどない。杯AⅡと杯AⅢの口径は一部重複して認められる。杯AⅤの底部外面はヘラ切り。66の口縁部外面には、沈線がめぐる。杯AⅠ・杯AⅤは碗とすべき器種かもしれない。

(3) 繁年の位置 (表3)

前述した窯跡の前後関係について考えてみたい。この中で最も古い窯跡は平岡窯跡である。杯A蓋を伴い、杯Bに高さによる分化が認められることなどが特徴である。次に小杉流団No.16遺跡2号窯-Ⅱが上げられる。杯B蓋の端部に単に挽き出しただけのものが含まれている。ただし、杯B蓋を中心に焼かれる口径の縮小化や、頂部内面調整の簡略化などから平岡窯跡の間に一型式入る可能性が強い。杯Bに高さによる分化が認められる行名山窯跡が次にくるであろう。杯B蓋は杯BⅢ蓋のみと考えてよいほど他は少ない。最後に小杉流団No.16遺跡2号窯-Ⅰの最終床面遺物がくる。杯B蓋にはA型態が認められる。このA型態は、小杉流団No.16遺跡1号窯灰層にも含まれており、両窯の操業終了時はほぼ同時期と考えられる。1号窯の操業開始時期については不明であるが、考古地磁気測定が相対年代を知る一つの参考になろう。1号窯の床面最下層¹⁴での測定値がAD 680±30年で、石名山窯跡や2号窯-Ⅰ・ⅡがAD 720~730¹⁵年に比べて若干古い数値が出ている。

編年の位置については、比較する資料が多くないが、平城宮の調査成果などを参考にすると、平岡窯跡は7世紀の第4四半期から末頃、小杉流団No.16遺跡2号窯-Ⅱを8世紀第1四半期の後半、石名山窯跡を8世紀第2四半期の初め、小杉流団No.16遺跡2号窯-Ⅰの最終床面遺物を8世紀中頃に比定したい。また、図示した小杉流団No.16遺跡1号窯出土遺物の多くは8世紀第2四半期のものと推定される。

- 注1 小杉町役場 1958 「2. 金山西陵の発掘」小杉町史 P.5~6
- 注2 橋本正春 1983 「育よとめ 瓦」富山県小杉町、大門町小杉流通委員会
内遺跡群第5次緊急発掘調査報告書 富山県教育委員会 P29
- 秀井龍廣 1983 「富山市角新田出土の瓦について」『富山縣小杉町・大門
町小杉流通委員会内遺跡群第5次緊急発掘調査報告書』富山県教育委員会 P27~29
- 注3 西片洋津 1985 「豊ヶ峯鉄山遺跡」富山県八尾町長山遺跡、京ヶ峰古墳
緊急発掘調査報告書』八尾町教育委員会 P19~25
- 注4 池野正男 1985 「No.7 遺跡第5号窯跡」『富山県小杉町、大門町小杉流通
委員会内遺跡群第3・4次緊急発掘調査報告書』富山県
教育委員会 P19
- 注5 池野正男 1982 「No.7 遺跡第1号窯跡」『富山県小杉町、大門町小杉流通
委員会内遺跡群第3・4次緊急発掘調査報告書』富山県
教育委員会 P11
- 注6 上野 幸 1982 「No.7 遺跡第5号窯跡」『富山県小杉町、大門町小杉流通
委員会内遺跡群第3・4次緊急発掘調査報告書』富山県
教育委員会 P29
- 注7 池野正男 1980 「No.16遺跡古墳時代の構造と遺物③第3号窯跡」『富山県
小杉町・大門町小杉流通委員会内遺跡群第2次緊急
発掘調査報告書』富山県教育委員会 P9
- 注8 口径では10.6~11cm、12cm代、13cm代に分かれ、12cm代のものが多い。
- 注9 橋本 正 1974 「古墳自動車の區域北陸道追跡調査」文化財緊急発掘
調査報告書 小杉町上野遺跡一紀録写真集』富山県教育委
員会 P3
- 注10 口径では10.6~11cm、12cm代、13cm代に分かれ、12cm代のものが多い。
- 注11 池野正男 1982 「No.6 遺跡」『富山県小杉町、大門町小杉流通委員会内
遺跡群第3・4次緊急発掘調査報告書』富山県教育委員会
- P50~66
- 注12 1号窯では10cm代、11cm代、12cm代に分かれ、11cm代のものが多い。
- 注13 沢井東洋・高木季子 1984 「中山王迹跡群」『富山県上野町庄城跡第4次
緊急発掘調査報告書』上野教育委員会 P16~25
- 注14 仁野卓・池野正男 1982 「3号窯跡」『富山県小杉町・大門町小杉流通委
員会内遺跡群第3・4次緊急発掘調査報告書』富山県教
育委員会 P11~29
- 注15 西 弘海 1978 「Y字跡2号物」飛鳥・高麗瓦発掘調査報告書』奈良國立
文化財研究所 P92~101
- 稻田卓也 1976 「3号物」『飛鳥・高麗瓦発掘調査報告書』奈良國立文化財
研究所 P27~28, 40~42
- 注16 注13の西弘海著P99の図及び奈良國立文化財研究所 1973「飛鳥・高麗
瓦発掘調査報告書』P7の図から割ったものである。
- 注17 鶴島正実氏の教示によると。
- 注18 上記の1、2の文書は池野正男氏との記載をもとにしている。
- 注19 「No.16遺跡奈良时代的遺体・遺物①第2分室…②第
2号窯」『富山県小杉町・大門町小杉流通委員会内
遺跡群第2次緊急発掘調査報告書』富山県教育委員会 P11~14
- 注20 小笠原好喜・西弘海 1976 「第5号窯跡2上層 山岡古墳における器物の
消長と形態の変化」『平城宮発掘調査報告書』奈良國立文
化財研究所 P144
- 注21 山本正敏 1984 「No.16遺跡(遺物)まとめ」『富山県小杉町・大門町小
杉流通委員会内遺跡群第6次緊急発掘調査報告書』富山
県教育委員会 P.5~8
- 注22 山本正敏氏の教示を得た
- 注23 広瀬公夫・青木木也 1982 「第1号窯跡」『小杉流通委員会内遺跡の考古学的
測定』『富山県小杉町・大門町小杉流通委員会内遺跡
群第3・4次緊急発掘調査報告書』富山県教育委員会 P98

VI 自然科学的分析

1 石名山1、2号窯の考古地磁気測定

富山大学理学部地球科学教室 広岡公夫、山本恭子

はじめに

土が焼かれると、土中に含まれる鉄酸化物は、地磁気方向の熱残留磁化を獲得し、そのときの地磁気を記録する。地磁気は時代とともに変化しているので、過去に焼かれて、そのままの状態で保存されている窯跡などの遺構は、その窯が使用されていた時代に固有の方向の磁化を現在まで保持しているのである。西南日本各地の、時代のよくわかった遺跡の焼土の測定によって、過去2000年間の地磁気永年変化の様子がわかっている（Iirooka, 1971; 広岡、1977）、それに照合すると、磁化方向のみから年代を推定できる。これが考古地磁気年代推定の方法である。

しかし、この年代推定法にもまだ幾つかの問題点が残されている。例えば、標準にしている地磁気永年変化曲線が本当に正しいものであるのか、西南日本の永年変化曲線が北陸やその他の地域でも適用できるのか、などである。また、時代が異っても地磁気の方向が同じこともあり、その場合には、考古地磁気学的には2つまたは3つの可能性のある推定年代値を与えることになる。更に、9、10世紀のように地磁気の変化が少ない時代には推定年代の誤差の幅が大きくなり、詳しい年代値を示すことができない。これらの問題点はあるが、通常の考古地磁気年代推定は、標準の永年変化曲線は正しいという前提で行われている。

試料の採取と測定

今回の石名山古窯跡の試料採取は、1号窯と2号窯で行われた。1号窯からは14個（試料番号HTY1431～1446）、2号窯から13個（HTY1451～1463）を採取し、総計27個の測定試料を得た。

考古地磁気測定のための試料は、それが窯体内でどのような方位をとっていたかがわかる定方位サンプルでなければならない。試料採取の際の方位測定にはクリノメーターの磁針が用いられるので、遺跡現場の磁北と真北のずれ、即ち、現在の偏角の分だけ測定方位がずれることになる。そのずれを知るために、1号窯と2号窯の間の地点でトランシットによる太陽の方位観測を行って、遺跡における現在の偏角の値を求めた。その地点の緯度、経度と時刻が与えることによって、その時刻の太陽の方位は計算から求めることができる。この方位は真北を基準にした地理学的な方位である。一方、遺跡現場でトランシットの磁針の北を基準にして測った太陽の方位角は磁北からの角度を与える。したがって、計算値と観測値の差から遺跡現場の現在の偏角が求まる。こうして西偏5.16°の値を得、この値を用いて試料の方位を真北を基準にした方位に補正している。

試料の熱残留磁化方向の測定は高感度の無定位磁力計で行った。この磁力計の心臓部は、同じ形で同じ強さを持つ小さな直方体の磁石（2mm×3mm×4mm）2個を、長さ約5cmの細い石英糸の上下の両端に反平行（平行でかつNS両極が逆むき）にして固定した磁石系で、非常に細い石英糸で吊るしてある。磁石1個を糸に吊るせば、磁気コンパスの針のN極が北を指すのと同じように、回転してN極が北に向く。しかし、反平行に2個の磁石をつないだ無定位磁力計では、上の磁石と下の磁石が回転しようとする方向は互いに逆になって、磁石系を回転させようとする地磁気の偶力は相殺されて磁石系は回転しない。地磁気を打ち消したと同じ状態なのである。このような状態の磁石系の下に測定試料を近づけると、試料の持つ磁化は弱いながらも、この磁石系に影響を与える。しかも、その影響の強さは距離の3乗に比例するので、下の磁石には大きいが、上の磁石にはほとんど効かない。この偶力の差のために、それまでの釣り合いが破れて磁石系は回転する。この回転角を、レーザー光源を用いた光でこによって増幅してみることができるようになっている。このようにして、地磁気よりもずっと弱い焼土試料の磁化の測定が可能となるのである。

実際の測定では、試料を磁石系の直下に置き、鉛直軸のまわりに45°ずつ回転する。試料を置きかえて、方位の測

定を行った石膏平面に対して、垂直または平行で互いに直交する3軸に選すので、これらの軸に垂直な平面内の磁化成分の方向と強度が測定される。この3平面内の磁化成分から三次元的な磁化の方向と強さを計算し、焼上が遺構の中にあった方位にもどし、土が焼かれたときの熱残留磁化の方向を求める。

熱残留磁化の測定結果

1号窯、2号窯から得た個々の試料の磁化測定結果は、第1、2表に示されている。1号窯の試料番号HTY-1434と2号窯のHTY-1451の磁化方向は、ともに同じ窓跡の他のものと非常に離れた方向に磁化していることがわかる。これは磁化獲得の後で何らかの理由で焼土が動いたか、天井や窓壁の焼土が窓に落ち込んだか、あるいはその部分だけ温度が上がりず充分な熱残留磁化を獲得していなかったか、などが原因でこのようになったと考えられ、正確な過去の地磁気の方向を示しているとは思われない。それ故、HTY-1434と1451の測定値は、1号窯、2号窯の平均磁化方向を計算する際に省いた。表中に*印がついているのが、これら平均磁化方向の統計計算から除外された試料であることを示している。

第3表にはフィッシャー統計法 (Fisher, 1953) による平均磁化方向、95パーセントの信頼角 (α_{95})、精度パラメータ (K) が示されている。 α_{95} は小さい程測定誤差の小さいことを意味しており、Kは大きい値を示す程その遺構の磁化方向のまとまりの良いことを表す。通常の良く焼かれた窓跡では α_{95} は 1 ~ 3 度、Kは数百の値となる。今回の測定結果をみると、2号窯の磁化方向のまとまりはあまり良くないことが α_{95} の値によってわかる。

考古地磁気推定年代

西南日本の過去2000年間の地磁気水年変化曲線に今回の測定結果を記入したのが第1図である。曲線上の二重丸が100年毎の、一重丸がその間の50年毎の地磁気の方向を表している。黒丸が考古地磁気測定結果を示しており、それを囲む円はフィッシャーの信頼角 (α_{95}) の範囲を示す。

考古地磁気推定年代は黒丸に最も近い水年変化曲線の部分の年代によって与えられる。 α_{95} の円内に含まれる水年変化曲線部分の長さが推定年代の年代幅を与える。

今回の測定結果を地磁気水年変化曲線に記入した第1図から得られる考古地磁気推定年代は

1号窯	A.D. 725 ± 25年
2号窯	A.D. 640 ± 30年

となる。

引用文献

- R. A. Fisher (1953) Dispersion on a sphere, Proc. Roy. Soc. London, A, vol. 217, 295-305.
K. Hiirooka (1971) Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in southwest Japan, Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral., vol. 38, 167-207.
広岡公夫 (1977) 考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究、vol. 15, 200-203.

第1表 石名山1号窯の磁化測定結果

試料番号	偏角($^{\circ}$ E)	伏角($^{\circ}$)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/gr.)
HTY-1431	-13.03	59.98	3.13
1432	-8.58	55.29	7.44
1433	-6.04	56.78	7.83
*1434	53.00	65.47	1.13
1435	-8.43	52.39	20.7
1437	-19.58	62.35	1.32
1438	-16.89	51.84	5.86
1439	-4.67	53.26	14.2
1440	-10.76	54.80	18.8
1441	-4.06	49.92	23.6
1442	-11.92	55.90	7.83
1444	-5.70	51.97	10.9
1445	-1.97	54.77	29.7
1446	-9.85	53.32	6.81

*：平均磁化方向を求める統計計算の際に除外したもの

第3表 石名山古窯の考古地磁気測定結果

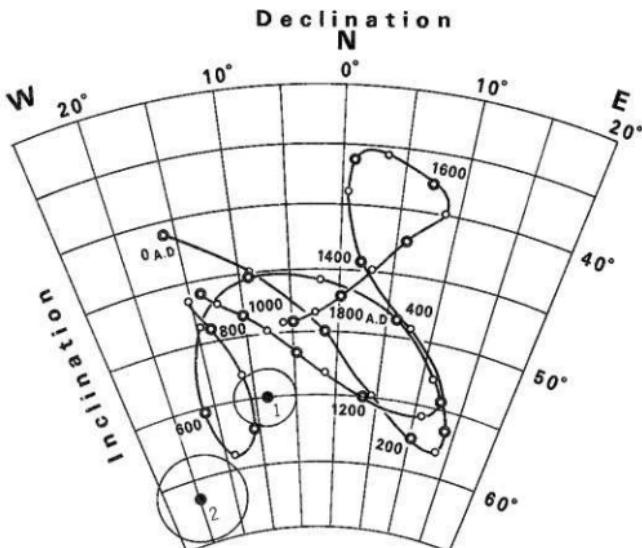
窓名	N	平均偏角($^{\circ}$ E)	平均伏角($^{\circ}$)	$\sigma^m(^{\circ})$	K
1号窓	13	-8.61	54.90	2.17	362.9
2号窓	11	-19.95	61.51	3.21	202.1

N：試料個数、 σ ：フィッシャーの信頼角、K：フィッシャーの精度パラメータ

第2表 石名山2号窓の磁化測定結果

試料番号	偏角($^{\circ}$ E)	伏角($^{\circ}$)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/gr.)
*HTY-1451	-31.74	44.33	2.81
1452	-24.41	62.01	0.652
1453	-19.80	63.97	1.17
1454	-7.70	56.97	4.46
1455	-21.40	62.74	1.18
1456	-11.22	61.90	2.75
1457	-18.77	63.24	2.47
1458	-21.92	65.97	1.34
1460	-20.46	62.01	4.77
1461	-7.49	54.60	1.97
1462	-36.36	57.69	0.911
1463	-32.93	62.16	1.64

*：平均磁化方向を求める統計計算の際に除外したもの



第1図 石名山古窓1号、2号の考古地磁気測定結果と西南日本の地磁気永年変化

1：1号窓、2：2号窓

2 富山県大門町「石名山窯跡の西区の穴」の¹⁴C年代測定

木立 雅郎

<方法>

出土した木炭は、ベンゼン液体シンチレーション法によって測定した。¹⁴C年代測定法には、この他にアセチレン(C₂H₂)・ガス法や加速器法などがあるが、その精度にはほとんど差がない。ベンゼン液体シンチレーション法は、試料をベンゼン(C₆H₆)まで合成しなければならないため、他の方法以上に多くの時間と労力をかけなければならないが、繰り返し測定できるという利点がある。今回の試料もその利点を生かして3回測定し、その平均値を求めた(1回につき1000分間測定)。

試料の前処理は、NaOH 5%溶液・HCl 5%溶液で各3時間煮沸したのち、蒸留水で煮沸洗浄して行なった。なお、溶液は1時間ごとにさまで交換した。

<測定値>

K L-614 石名山窯跡の西地区の穴下層出土木炭

1600±110B.P. (AD 350) [1650±110B.P. (AD300)]

*半減期は5568年、〔 〕内は5730年。半減期は¹⁴C年代測定法の創始者であるリバーの求めた5568年が国際的なとりきめとされてきたが、最近では5730年がもっと確からしいと考えられている。

<¹⁴C年代と考古年代の差について>

上記の¹⁴C年代は、7世紀初めとする考古年代とは140~410年くらい違う。明らかに¹⁴C年代は古すぎるよう感じられる。ただし、¹⁴C年代測定の誤差は時として数100年に及ぶ場合があるから、今回の試料のみで判断するのは危険である。そこで、他のいくつかの試料と比較する必要がでてくるが、その結果、北陸各地の須恵器窯で同様の傾向が認められた。¹⁾また、富山県内の奈良・平安時代の炭焼窯でも同様の傾向が認められる。²⁾これらの測定は、学習院大学、金沢大学、九州大学の3ヶ所で行なわれていたものが、3ヶ所とも同様の傾向を示している。¹⁴C年代の誤差を無視すれば、北陸の7~9世紀の須恵器窯・炭焼窯の¹⁴C年代は、考古年代より300~800年古くなっている。それに対して、近畿地方では150年程度古くなる傾向はあるものの、北陸に比べればはるかに近い値を示している。³⁾現在のところ、北陸と近畿以外の地域で対比していないが、¹⁴C年代が地域的なまとまりと特徴をもつことは明らかである。この他にも、アイダホ火山灰の¹⁴C年代が西日本と東日本で大きく違つてることが指摘されているが、原因は明らかではない。

今まで¹⁴C年代に対する充分な批判的検討はなされておらず、考古学者は時として「オール・オア・ナッシング」と言う自負勝手な解釈に落ちいったり、理解できないままに無視したりする。何のために測定を依頼したのか理解できない報告書一絶版の後に測定結果だけを掲載するものなどはその典型例であるーはザラである。測定をする側にも問題があり、両者は試料や測定結果についてもっと討論する必要がある。その場合、地理、地学などより多くの学問分野同志がお互いの学問領域に踏み込むだけの努力と勇気がなければならない。ここで指摘した問題はそうした中ではじめて解決され、かつ、学際的な発展をもたらすだろう。

(860108)

追記：測定は阪上正信教授の御好意と協力により、金沢大学附属低レベル放射能実験施設において、木立が行なった。

注

(1)中国考古学中報「四年代数据集 1965~1981」中国社会科学院考古研究所編著、文物出版社出版、1983。原理・方法・問題も適切にまとめられている。¹⁴C年代測定法に対する態度は色々な意味で日本とは大きく異なる。

(2)坂口町湯原古窯跡：坂口町教育委員会、1985。

「金沢大学理学部附属低レベル放射能実験施設研究概要・年次報告書 1984.4~1985.3」低レベル放射能実験施設、1985。

(3)関清「製鉄用炭窯とその意義」『大塚』第9号、1985。P54~55の「表2 窯内炭窯一覧表」に、考古推定年代・熱残留磁気測定値・¹⁴C測定値を併記。前2者が比較的近いのに対し、¹⁴C年代は明らかに古い。

(4)注(2)と同じ。

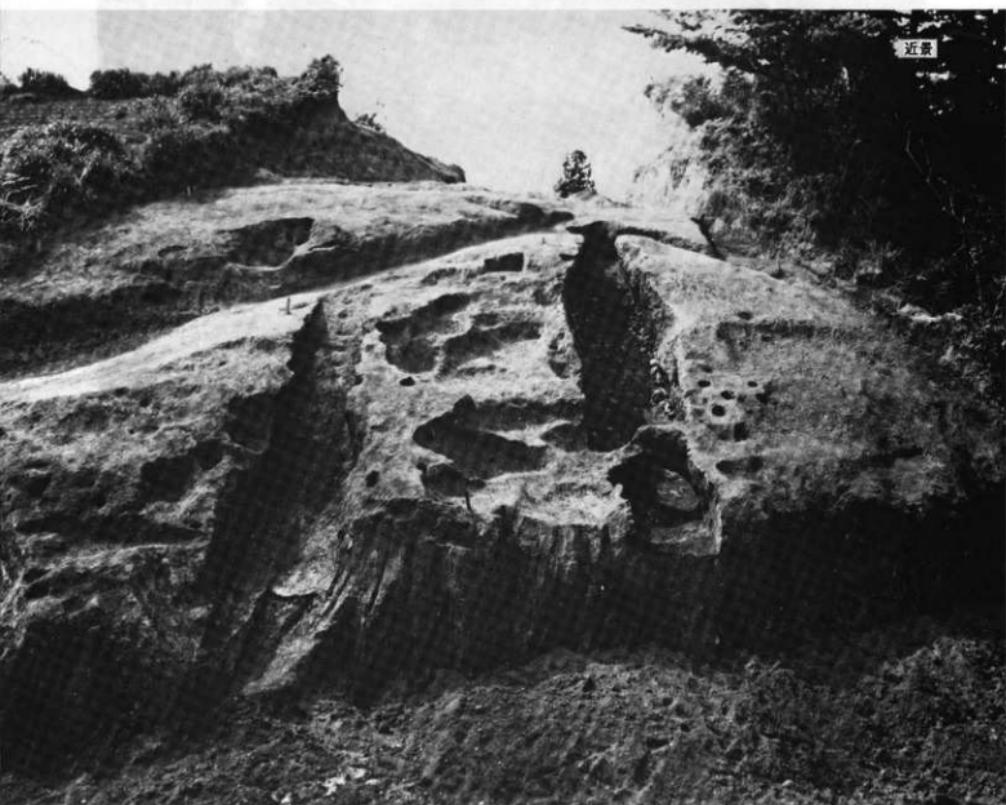
図版1
航空写真

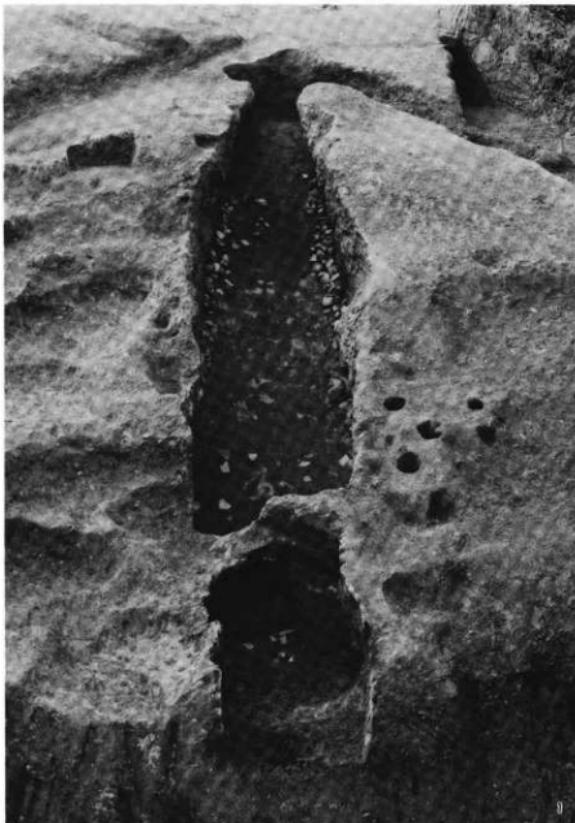


圖版 2
遺跡全景

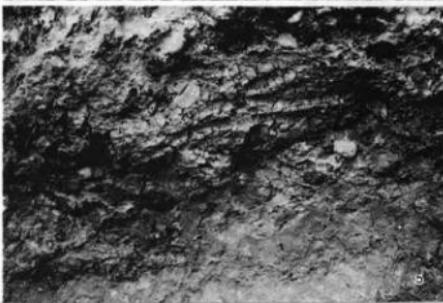
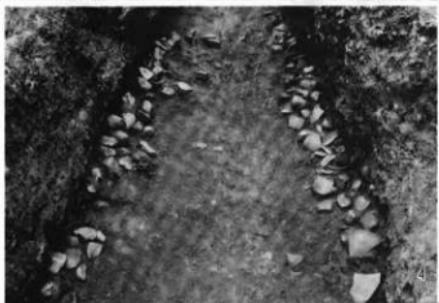


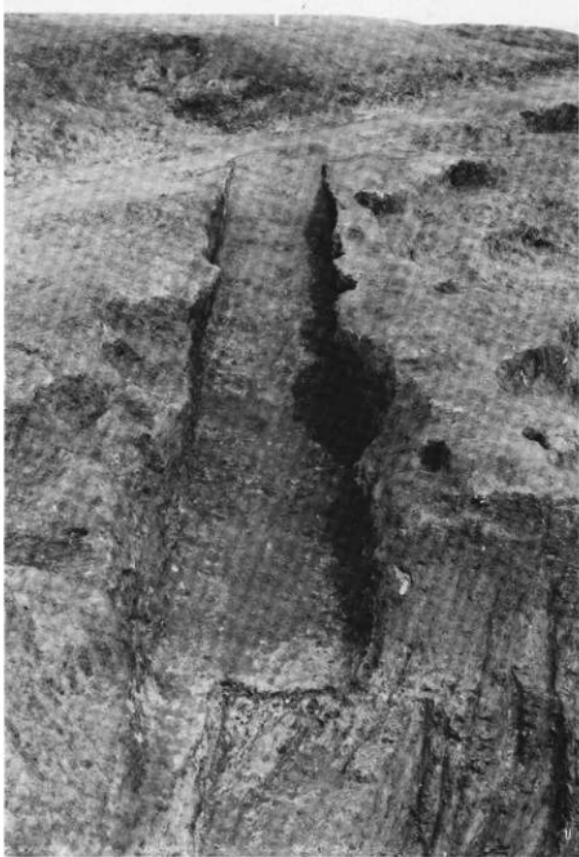
近景



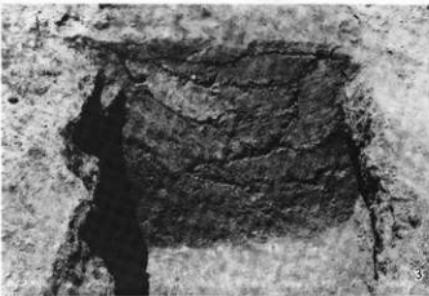
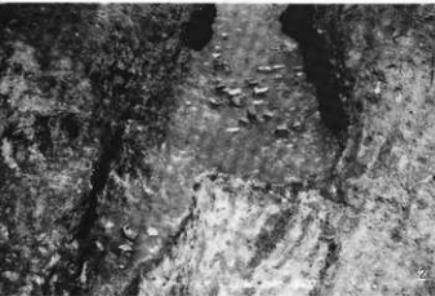


1. 全景
2. 焚口の土層
3. 焚口の天井部遺存
4. 窯体内の遺物出土
状況
5. 側壁の貼壁





1. 全景
2. 窯体内的遺物
出土状況
3. 窯体内的土層
4. 側壁の貼盤
5. 発掘作業風景





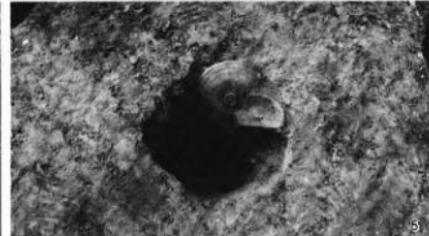
1. 2~4号穴



2. 4号穴
遺物出土
状況
3. 3号穴
遺物出土
状況



4. 4号穴
土器一括
出土状況
5. 1号穴
遺物出土
状況



6. 8号穴の
土層
7. 11号穴の
土層



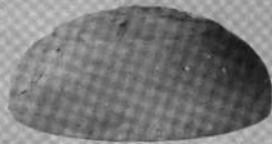
8. 10号穴
の土層
9. 西地区
の穴



圖版 6
出土遺物



25



9



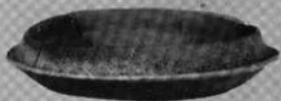
7



17



16



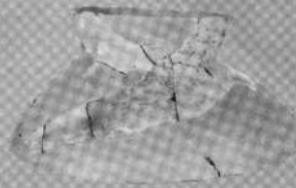
18



29



31



45
1 : 6

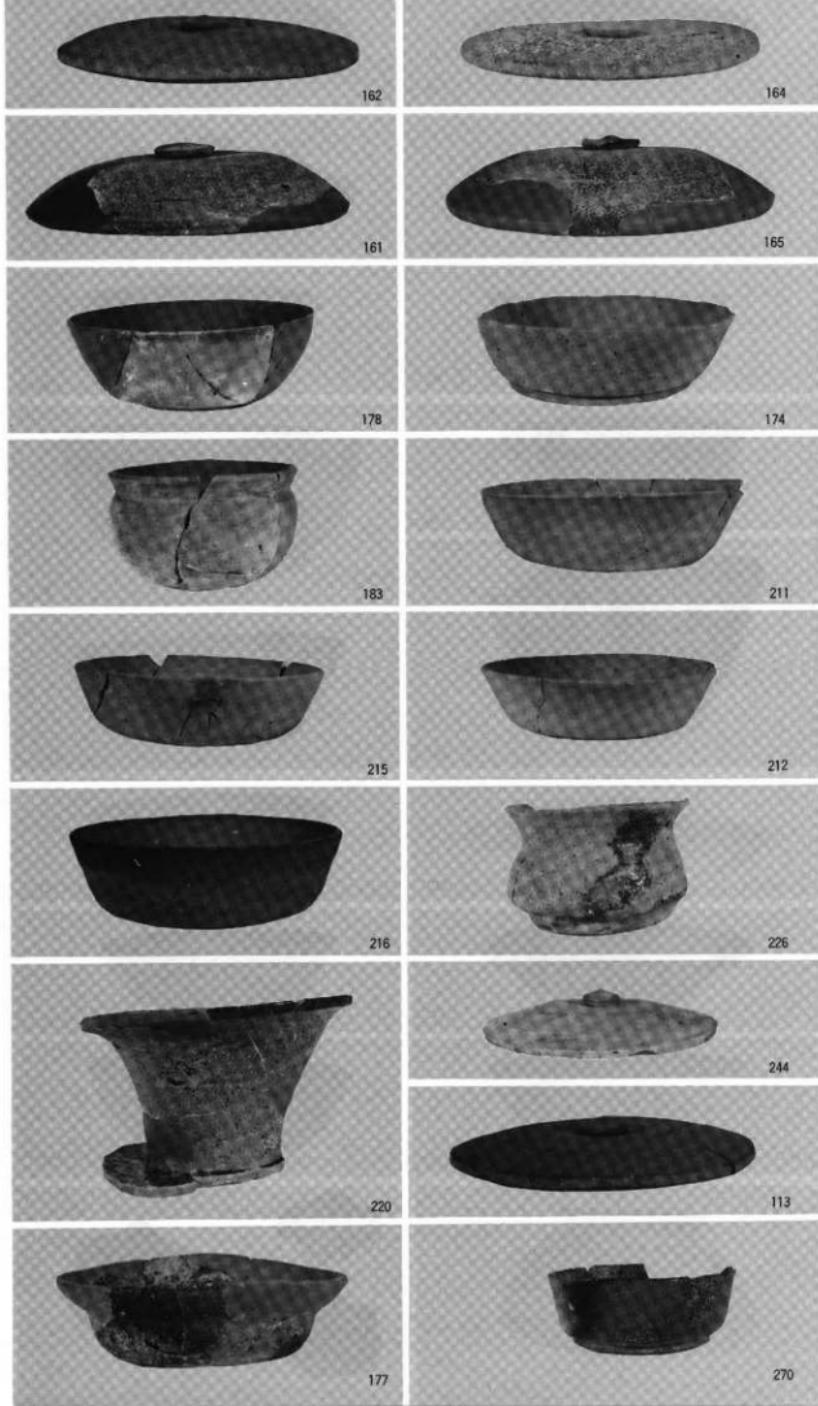


314

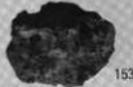
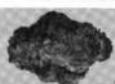
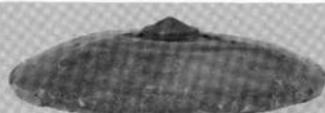


313

圖版 7
出土遺物



圖版 8
出土遺物



152
1 : 6
153-154-120
1 : 3

石名山廬跡発掘調査報告

発行日 昭和61年3月31日

編集 富山県埋蔵文化財センター

発行 大門町教育委員会

印刷 ヨシダ印刷株式会社

